

柏崎市の遺跡21

—新潟県柏崎市内遺跡 平成22年度発掘調査報告書—

2012

柏崎市教育委員会

柏崎市の遺跡 21

— 新潟県柏崎市内遺跡 平成 22 年度発掘調査報告書 —

2012

柏崎市教育委員会

序

平成 23 年 3 月、「下谷地遺跡出土品」が新潟県の有形文化財（考古資料）に指定されました。吉井地区の下谷地遺跡は、北陸自動車道建設事業に伴い、昭和 52・53 年度に発掘調査が行われています。弥生時代中期の北陸地方における大規模な集落跡であることが評価され、遺跡は昭和 54 年に国の史跡に指定されました。その後、発掘調査で発見された遺物についても、新潟県の初期農耕集落の様相をよく示す資料として重要視され、このたびの指定となりました。当市では 21 件目の県指定文化財です。平成 23 年 4 ～ 5 月、市教育委員会では指定を記念してミニ展示を開催いたしました。ご来場の皆様には、約 2,000 年前の柏崎に花開いた弥生文化の一端をご覧いただけたかと思います。

ところで、下谷地遺跡のように指定文化財となる遺跡はごく一部ですが、その他にも地域の歴史を伝える遺跡は市内に多く所在しており、教育委員会ではそれらの保護に努めています。その一環として、遺跡の範囲と推定される区域に何らかの土木工事等が計画される場合に、遺跡の有無や内容など、保護に関して必要なデータを得るために試掘調査・確認調査を実施します。これは国県の補助金を得た柏崎市内遺跡発掘調査事業にて対応していますが、第 21 期となる平成 23 年度も 10 件の調査業務を実施しました。また、22 年度に実施した 6 件の調査について整理・報告業務を行いましたので、それを本書に収録します。22 年度は 3 件の調査で遺構・遺物が確認されており、天皇峰遺跡・甲戸遺跡・清水尻遺跡・伊毛大新田遺跡の 4 遺跡を新たに柏崎市の埋蔵文化財包蔵地に加えることができました。柏崎市内遺跡発掘調査事業による調査は小規模なものがほとんどですが、得られた資料の蓄積は各地域における歴史の理解へつながっていくことでしょう。

最後に、埋蔵文化財の保護にご理解とご協力をいただいた各土木工事等の事業主体者および関係各位、本事業に格別なるご助力とご配慮をいただいた新潟県教育委員会、そして調査に参加されました調査員・補助員の皆様に対し、深く感謝するとともに、改めて御礼申し上げます。

平成 24 年 3 月

柏崎市教育委員会

教育長 大倉政洋

例　　言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市における各種の土木工事等に伴って実施した試掘調査・確認調査等の記録である。
2. 本事業は、柏崎市教育委員会が主体となり、国・県の補助金を得て平成3年度から実施している「柏崎市内遺跡発掘調査事業」である。平成23年度は第21年次（第21期）であることから、本報告書は『柏崎市の遺跡21』とした。
3. 第21期で刊行する本報告書は、平成22年度において4遺跡（群・隣接地）・2地区に対して実施した計6件の試掘調査・確認調査の報告を所収する。
4. 各調査の現場作業は、教育総務課（遺跡考古館）職員および柏崎市遺跡考古館のスタッフを調査員・調査補助員として実施した。

整理・報告書作成作業は、柏崎市遺跡考古館（柏崎市小倉町）・同館西山整理室（柏崎市西山町西山）において、職員（学芸員）を中心に同館等のスタッフで行った。

5. 調査によって出土した遺物の注記は、各遺跡・地区等の略称の他、試掘坑名、層序等を併記した。
6. 本事業で出土した遺物並びに調査や整理作業の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会（柏崎市遺跡考古館）が保管・管理している。

7. 本報告書の執筆は、下記のとおりの分担執筆とし、編集は伊藤が行った。

第I章・第II章・第V章（除：附節）・第VI章 中島義人
第III章・第V章附節・第VII章・第VIII章 伊藤啓雄
第IV章 中野 純

8. 本書掲載の図面類の方位は全て真北である。磁北は真北から西偏約7度である。

9. 発掘調査から本書作成に至るまで、それぞれの事業主体者および関係者等から様々なご協力とご理解を賜った。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

徳間香代子 丸山道子 水澤幸一 吉浦啓子 (50音順・敬称略)
鶴川コミュニティセンター 別俣コミュニティセンター 伊毛町内会 市野新田町内会
上野町内会 久米町内会 甲戸町内会 砂田町内会 銀町内会 長嶺町内会
農林水産省（北陸農政局 柏崎周辺農業水利事業所） 新潟県（柏崎地域振興局） 新潟県教育委員会 (順不同・敬称略)

目 次

I 序 説	1
1 平成22年度発掘調査事業の概要と試掘調査・確認調査	1
2 試掘・確認調査の位置と環境	2
II 坂田地区	3
1 調査に至る経緯	3
2 調査対象地の地形と周辺の遺跡	3
3 試掘調査	5
4 調査のまとめ	6
III 女谷・市野新田遺跡群（第3次）	7
1 調査に至る経緯	7
2 調査の概要	8
3 調査のまとめ	16
IV 別俣地区（第1次）	17
1 調査に至る経緯	17
2 試掘調査	17
3 調査のまとめ	20
V 内郷遺跡群	21
1 調査に至る経緯	21
2 調査区と周辺の環境	21
3 試掘調査	22
4 まとめ	32
附 周辺区域採集遺物	32
VI 長嶺前田遺跡（第1次）	35
1 調査に至る経緯	35
2 調査区と周辺の環境	35
3 試掘調査	36
4 まとめ	40
VII 剣下川原遺跡隣接地	41
1 調査に至る経緯	41
2 試掘調査	42
3 調査のまとめ	44
V 総 括	45
〈引用・参考文献〉	45
〈調査体制〉	46
〈報告書抄録〉	卷末

図版目次

II 図版1 坂田地区

- a. 調査区近景
- b. 調査区近景
- c. T P 1 完掘
- d. T P 1 セクション
- e. T P 1 深堀り部セクション
- f. T P 2 完掘
- g. T P 2 セクション
- h. 作業状況

III 図版2 女谷・市野新田遺跡群(第3次)

- a. A 地区(天皇峰遺跡)近景
- b. B 地区近景

図版3 女谷・市野新田遺跡群(第3次)

- a. A-1 作業風景
- b. A-1 試掘坑全景
- c. A-3 試掘坑全景
- d. A-5 試掘坑全景
- e. A-6 試掘坑全景
- f. S X-6 焼土坑
- g. A-7 試掘坑全景
- h. A-8 試掘坑全景

図版4 女谷・市野新田遺跡群(第3次)

- a. A-9 試掘坑全景
- b. S D-9 溝跡
- c. A-11 試掘坑全景
- d. A-12 試掘坑全景
- e. A-13 試掘坑全景
- f. S K-10 土坑
- g. A-14 試掘坑南北ピット群
- h. A-17 試掘坑全景

図版5 女谷・市野新田遺跡群(第3次)

- a. S D-16 溝跡
- b. S D-16 溝跡
- c. A-19 試掘坑全景
- d. A-20 試掘坑全景
- e. A-21 試掘坑全景
- f. A-22 試掘坑全景
- g. A-1 試掘坑土層
- h. A-2 試掘坑土層
- i. A-3 試掘坑土層
- j. A-4 試掘坑土層

図版6 女谷・市野新田遺跡群(第3次)

- a. A-5 試掘坑土層
- b. A-6 試掘坑(北)土層
- c. A-6 試掘坑(南)土層
- d. A-7 試掘坑土層
- e. A-8 試掘坑土層
- f. A-9 試掘坑土層
- g. A-10 試掘坑土層
- h. A-11 試掘坑土層
- i. A-12 試掘坑土層
- j. A-14 試掘坑土層
- k. A-15 試掘坑土層
- l. A-16 試掘坑土層
- m. A-17 試掘坑土層
- n. A-18 試掘坑土層
- o. A-19 試掘坑土層
- p. A-20 試掘坑土層
- q. A-21 試掘坑土層
- r. A-22 試掘坑土層

図版7 女谷・市野新田遺跡群(第3次)

- a. B-2 試掘坑全景
- b. B-4 試掘坑全景
- c. B-5 試掘坑全景
- d. B-6 試掘坑全景
- e. B-1 試掘坑断面
- f. B-2 試掘坑断面
- g. B-3 試掘坑断面
- h. B-4 試掘坑断面
- i. B-5 試掘坑断面
- j. B-6 試掘坑断面

IV 図版8 別俣地区(第1次)

- a. 別俣地区全景

b. 別俣地区全景

図版9 別俣地区(第1次)

- a. A 地区近景

b. A-1 試掘坑全景

- c. A-1 試掘坑土層

- d. A-2 試掘坑全景

e. A-2 試掘坑土層

図版10 別俣地区(第1次)

- a. B 地区近景

b. B 地区近景

- c. B-1 試掘坑全景

- d. B-1 試掘坑土層

e. 調査作業

- f. 調査作業

- g. C-1 試掘坑全景

h. C-1 試掘坑土層

図版11 別俣地区(第1次)

- a. C 地区近景

b. C-2 試掘坑全景

- c. C-3 試掘坑全景

- d. C-4 試掘坑全景

e. C-4 試掘坑土層

V 図版12 内郷遺跡群

- a. 甲戸地区近景

b. 甲戸地区近景

- c. 甲戸遺跡近景

- d. 清水尻遺跡近景

e. 別山地区東部近景

- f. 別山地区西部近景

- g. 伊毛大新田遺跡近景

h. 伊毛地区近景

図版13 内郷遺跡群 2

- a. TP 1層位
- b. TP 2層位
- c. TP 4層位
- d. TP 3層位
- e. TP 3排溝場上面
- f. TP 5層位
- g. TP 6層位
- h. TP 7層位
- i. TP 8層位
- j. TP 9層位
- k. TP 10層位

図版14 内郷遺跡群 3

- a. TP 11層位
- b. TP 12層位
- c. TP 13層位
- d. TP 14層位
- e. TP 15層位
- f. TP 16層位
- g. TP 17層位
- h. TP 18層位
- i. TP 19層位
- j. TP 20層位
- k. TP 21層位
- l. TP 22層位

図版15 内郷遺跡群 4

- a. TP 23層位
- b. TP 24層位
- c. TP 25層位
- d. TP 26層位
- e. TP 27層位
- f. TP 28層位
- g. TP 29層位
- h. TP 30層位
- i. TP 31層位
- j. TP 32層位
- k. TP 33層位
- l. TP 34層位

図版16 内郷遺跡群 5

- a. TP 35層位
- b. TP 36層位
- c. TP 37層位
- d. TP 36構検出状況
- e. TP 38構検出状況
- f. TP 38層位
- g. TP 39層位
- h. TP 40層位
- i. TP 41層位
- j. TP 42層位
- k. TP 43層位

図版17 内郷遺跡群 6

- a. TP 44層位
- b. TP 45層位
- c. TP 46層位
- d. TP 47層位
- e. TP 49層位
- f. TP 50層位
- g. TP 48層位
- h. TP 48構検出状況
- i. TP 51層位
- j. 調査状況

図版18 内郷遺跡群 7

- a. 戸田遺跡出土遺物
- b. 清水尻遺跡出土遺物

図版19 内郷遺跡群 8

- a. 伊毛大新田遺跡出土遺物 1
- b. 伊毛大新田遺跡出土遺物 2

図版20 内郷遺跡群 9

- a・b. 周辺区域（西山町尾頭部地区）採集遺物 1
- c・d. 周辺区域（西山町尾頭部地区）採集遺物 2

VI 図版21 長嶺前田遺跡（第1次） 1

- a. 調査区TP 1付近
- b. 調査区TP 5付近
- c. 調査区TP 7付近
- d. 調査区TP 8付近
- e. TP 1セクション
- f. TP 1下層腐植層
- g. TP 2セクション
- h. TP 2腐植層上面

図版22 長嶺前田遺跡（第1次） 2

- a. TP 3セクション
- b. TP 3青灰色層上面
- c. TP 4セクション
- d. TP 4構検出状況
- e. TP 5セクション
- f. TP 5構検出状況
- g. TP 6セクション
- h. TP 6青灰色層上面

図版23 長嶺前田遺跡（第1次） 3

- a. TP 7セクション
- b. TP 7青灰色層上面
- c. TP 8セクション
- d. TP 8青灰色層上面

VII 図版24 剣下川原遺跡隣接地 1

- a. 調査対象区域近景
- b. TP-C 1全景
- c. TP-C 1断面
- d. TP-C 2全景

図版25 剑下川原遺跡隣接地 2

- a. TP-C 3全景
- b. TP-C 3断面
- c. TP-C 1調査風景
- d. 出土遺物 1
- e. 出土遺物 2

挿 図 目 次

I 第1図	第21期発掘調査対象地点位置図	2
II 第2図	坂田地区試掘調査 調査対象地と周辺の遺跡	4
第3図	坂田地区試掘調査 トレンチ配置図	5
第4図	坂田地区試掘調査 土層柱状模式図	6
III 第5図	市野新田地区的遺跡と試掘調査対象区域	9
第6図	女谷・市野新田遺跡群第3次試掘調査 A地区試掘坑配置模式図	11
第7図	女谷・市野新田遺跡群第3次試掘調査 A地区土層柱状模式図	12
第8図	女谷・市野新田遺跡群第3次試掘調査 A地区検出遺構模式図	13
第9図	女谷・市野新田遺跡群第3次試掘調査 B地区試掘坑配置模式図	15
第10図	女谷・市野新田遺跡群第3次試掘調査 B地区土層柱状模式図	15
IV 第11図	別俣地区第1次試掘調査地区	19
第12図	別俣地区第1次試掘調査 試掘坑配置図	19
第13図	別俣地区第1次試掘調査 基本層序柱状模式図	20
V 第14図	内郷遺跡群試掘調査 調査対象地と周辺の遺跡	23
第15図	内郷遺跡群試掘調査 甲戸地区トレンチ配置図	25
第16図	内郷遺跡群試掘調査 別山地区トレンチ配置図	27
第17図	内郷遺跡群試掘調査 伊毛地区トレンチ配置図	28
第18図	内郷遺跡群試掘調査 土層柱状模式図	29
第19図	内郷遺跡群試掘調査 出土遺物	30
第20図	内郷遺跡群周辺区域（西山町尾頭部地区）のおもな採集遺物	33
第21図	昭和53年度西山町尾頭部地区のは場整備範囲と周辺の遺跡	34
VI 第22図	長嶺前田遺跡第1次確認調査 調査対象地と周辺の遺跡	36
第23図	長嶺前田遺跡第1次確認調査 トレンチ配置図	38
第24図	長嶺前田遺跡第1次確認調査 土層模式図	39
第25図	長嶺前田遺跡第1次確認調査 出土遺物	40
VII 第26図	剣下川原遺跡隣接地採集遺物	42
第27図	剣下川原遺跡隣接地試掘調査 試掘坑配置模式図	43
第28図	剣下川原遺跡隣接地試掘調査 対象地区概要図	43
第29図	剣下川原遺跡隣接地試掘調査 基本層序柱状模式図	44
第30図	剣下川原遺跡隣接地試掘調査 TP-C2検出遺構模式図	44

挿 表 目 次

I 第1表	平成22年度柏崎市の発掘調査（現場作業）一覧	1
II 第2表	女谷・市野新田遺跡群第3次試掘調査 試掘坑集計表	16
V 第3表	内郷遺跡群試掘調査 トレンチ別成果一覧表	31
第4表	内郷遺跡群周辺区域（西山町尾頭部地区）のおもな採集遺物一覧表	34
VII 第5表	剣下川原遺跡隣接地C・D地区採集遺物集計表	42

I 序 説

1 平成22年度発掘調査事業の概要と試掘調査・確認調査

平成22年度に柏崎市教育委員会が調査主体となって実施した発掘調査事業は、試掘・確認調査が6件であった。他に工事立会による調査が11件である。試掘・確認調査の原因事業は、ほ場整備事業、県道改良工事、農業用水ダム建設事業などの、大規模な工事に伴わるものが多い。近年、減少傾向にあった大規模な開発事業が柏崎市においてはやや増加傾向に転じてきているようである。今回の報告の対象となった事業は、いずれも以前から計画があがっていたものが事業着手に漕ぎ着けたものである。農業用水ダム建設、ほ場整備事業、バイパス建設事業といった国、もしくは県営の大規模な事業に伴うものである。調査では、これまで存在が知られていなかった埋蔵文化財包蔵地が新たに発見されたものもある。これらは、事業主体者側の協力により設計変更がなされ、遺跡が全面的に保存されたものもある。また、本発掘調査に至ったものでも、早期から協議を進めてきていたため、円滑に調査を実施することができた。また、当年度に実施した工事立会でも、事前協議により埋蔵文化財包蔵地の大部分を現状保存することができたものも多い。市内遺跡発掘調査事業が埋蔵文化財の保護に資する役割が大きいことを再確認することができる。ただし、現状では開発事業に対応することに終始している試掘・確認調査も、文化財保護部局の主体的な計画のもとで埋蔵文化財包蔵地の状況を早期に把握していくことも必要であろう。

工事立会は、設計変更で大規模な掘削を免れたもの、もともと工事範囲が狭小なものなどがある。ほ場整備事業では、用排水路などの掘削深度を確保せざるを得ない部分などを対象としているが、設計変更などにより遺跡の大部分を現状保存することができた。歩道整備に伴うものは、対象範囲が狭小であるとともに、掘削深度も浅いことから、埋蔵文化財包蔵地の損壊には至らなかった。携帯電話基地局の建設に伴うものは近年増加傾向にあり、今後もこの傾向は続くであろう。これらの工事に適切に対応するためにも、埋蔵文化財包蔵地を事前に把握することは重要であろう。

No.	道跡・地区	種別	調査期間	調査期間	対象面積	調査面積	備考
1	内堀遺跡群	試掘	県営中山間地域総合整備事業	10~11月	127,800 m ²	229.5 m ²	甲戸遺跡・清水尾・伊毛大新田遺跡を発見
2	長岡前田遺跡	確認	一般農地と山西山寺跡東側南北路	11月	4,000 m ²	34.5 m ²	古墳時代~中世の遺構・遺物
3	坂田地区	試掘	草若ため池整備事業(河川・大規模)坂田地区	5月	300 m ²	10.0 m ²	
4	朝下川原遺跡(陶寺跡)	確認	一般農地	3月	800 m ²	6.0 m ²	
5	別所地区	試掘	県営中山間地域総合整備事業	10月	4,000 m ²	30 m ²	
6	女谷・山野新田遺跡群	確認	市町新田グム	6月	218,500 m ²	577 m ²	天台寺遺跡を発見
7	長岡遺跡	立会	携帯電話塔基礎設	3月			
8	猪石津遺跡	立会	歴史収蔵庫	11月			南朝路・瓦
9	坂田遺跡	立会	ガスパイプライン撤去	11月			
10	坂田遺跡	立会	県単歩道	11~12月			
11	札井遺跡	立会	携帯電話塔基礎設	7月			
12	柳町遺跡	立会	税込鳥小改築開通	12月			
13	箕輪遺跡(箕輪城)	立会	雨水幹管	9月			
14	經井川新田遺跡群開削地	立会	送電線敷設建設	8月			
15	馬場・天神遺跡	立会	県単歩道	5月			
16	鬼ノ倉遺跡	立会	県営はねだ整備事業	10月			古墳時代土器
17	市野新田地区	立会	市町新田グム開通	8月			

第1表 平成22年度柏崎市の発掘調査（現場作業）一覧

2 試掘・確認調査の位置と環境

柏崎市は日本海に面した新潟県のほぼ中央に位置し、広さは約442.7km²である。市域は柏崎平野とこれを取り囲む丘陵・山地からなり、これら丘陵から鶴石川と鶴川が流れ出て日本海に至っている。両河川の河口には柏崎砂丘と荒浜砂丘が広がっており、その後背地は湿地性の高いものとなっている。平野を取り囲む丘陵は東頸城丘陵の一部で、米山・黒姫山・八石山の刈羽三山を頂とし、北東部には摺曲構造が発達した西山・曾地・八石丘陵が規則的に並んで北北東方向に続いている。試掘・確認調査を実施した地域の概要は以下のとおりである。

内郷・坂田・長嶺地区は、鶴石川の支流である別山川の中・上流域に位置する。西山・曾地丘陵にはさまれた狭い沖積地に立地する。

剣下川原遺跡は、鶴石川中流域の右岸段丘上に位置する。約800m下流で別山川との合流点に達する。周囲は開けた沖積地である。

別俣地区は、鶴川支流の上条芋川左岸の段丘上である。周囲は南側から続く低・中位丘陵に囲まれ、その両側に鶴川と鶴石川が流れる。

女谷・市野新田地区は、鶴川上流域に位置する。米山に連なる山塊、東から南を黒姫山・鶴の巣山・兜巾山・尾神岳といった山々に囲まれた盆地である。



第1図 第21期発掘調査対象地点位置図 (S = 1:150,000)

II 坂田地区

－ 県営ため池等整備事業（河川・大規模）坂田地区に係る試掘調査－

1 調査に至る経緯

柏崎市の北東部に位置する西山町坂田地区は、西山町地域の中央を流れる別山川とは低位丘陵によって隔てられていることから、農業用水の多くは坂田川に頼っている。新潟県教育委員会がとりまとめた平成22年度国・県関係機関等土木工事等状況調査に、今回の原因事業である県営ため池等整備事業（河川・大規模）坂田地区が掲載されていた。その中で、今回の調査対象地では坂田川に設置されている頭首工を改修するものがあった。松本腰とよばれるこの頭首工は老朽化が著しく、かねてから改修の要望が地元関係者からなされていた。これを受け、平成18年度から改修事業は計画されたのだが、平成19年に発生した新潟県中越沖地震の影響により延期されてきた。平成22年度から再開される当工事では、新たな頭首工を設置し、隣接地には操作室と管理用道路の建設も新たに設けるものである。また、工事中に坂田川の流れを迂回させるための仮排水路の掘削も計画されていた。頭首工は現在の坂田川の中で行うもので、特に埋蔵文化財に影響を与えるとは考えられなかった。その他の付帯的な工事は、いずれも坂田川左岸の平坦地に用地を取得して行うものである。管理用道路は盛土後に砂利敷きを行う計画のため、埋蔵文化財への影響はないものと判断された。しかし、操作室と仮排水路の施工は大規模な掘削が行われるものであった。操作室の基礎工事では4m×45mの範囲で深さ3mの掘削が行われ、仮排水路は延長57m、最大幅3mで坂田川の水流を妨げない深度まで掘り下げる予定であった。

事業予定地は、現在のところ埋蔵文化財包蔵地に該当はしていなかったが、坂田遺跡に近接している。また、当地区は西山町地域の中でも特に遺跡が濃密に分布していることから、工事着手前に当事業予定地の埋蔵文化財包蔵地の有無を確認する試掘調査を実施することで事業主体者の了解を得た。

2 調査対象地の地形と周辺の遺跡

柏崎市西山町坂田は、坂田川の中流部から上流部を中心に位置する。坂田川は曾地丘陵の地蔵峠付近から流れ出し、4km程の流程を経て別山川に合流する2級河川である。小規模な河川ではあるが、その流域には比較的開けた沖積地が形成され、その大部分で水田が営まれている。水系は、右岸側の低位丘陵に阻まれていることから別山川とは異なる。現在の住宅地は曾地丘陵から派生する支尾根の縁辺に沿うように展開しており、現在の西山町域で最も大きな町内会を形成している。坂田地区の南部には北陸自動車道西山I.C.があり、交通の要衝ともなっている。

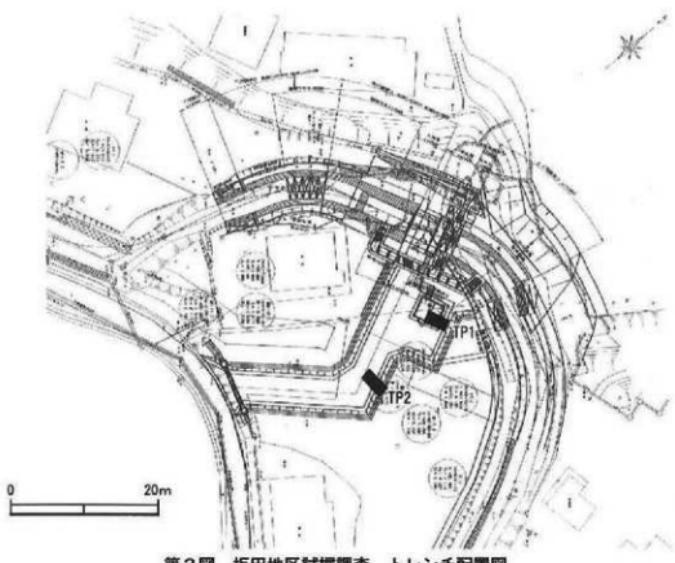
今回の調査対象地は、坂田川が低位丘陵の縁辺部を流れる左岸側の沖積地である。この地点では坂田川が大きく蛇行して流れおり、頭首工付近では右岸側の丘陵に斜面が崩落した様子も見て取れた。徐々に丘陵を浸食して、流れを変えてきているものと判断される。

調査地周辺には多くの埋蔵文化財包蔵地が所在する。最も近い坂田遺跡とは約120m離れている。この



第2図 坂田地区試掘調査 調査対象地と周辺の遺跡

間には住宅地が広がっており、地下の状況を窺い知ることができず、遺跡範囲は今後変わっていくことが想定される。坂田遺跡は古くから存在を知られており、一部では開発事業に伴う発掘調査も行われた。特に平安時代や中世の集落跡が検出されているが、坂田川左岸に中世の館跡の存在も想定されている〔鳴海 1992〕。また、坂田地内には縄文時代の集落跡である坪之内遺跡があるほか、古墳時代から中世の様々な資料が出土した遺跡が多く見つかっている。特に古墳時代以降、この地域は断続的にではあるが、活発に開



第3図 坂田地区試掘調査 トレンチ配置図

発がなされてきた様子を窺い知ることができる。

今回の調査対象地は現在の坂田川に隣接しており、旧河道にあたることも想定された。しかし、当事業対象地のように住宅に囲まれた地区では地表観察による埋蔵文化財の把握は困難である。このような機会に地下の状況を把握することは、今後の様々な開発行為との調整を行うにあたっても重要であることから、試掘調査を実施することとなった。

3 試掘調査

協議の結果を受け、柏崎市教育委員会（以下、「市教委」と略）では試掘調査の準備を開始し、平成22年5月6日に調査を実施することとした。この時点で事業予定地の用地取得はなされていなかったため、地権者の承諾を得て調査に着手した。文化財保護法第99条第1項の規定による新潟県教育委員会教育長への報告は、平成22年4月30日付け教秘第510号で市教委教育長より行った。

調査は法面パケットを装着したバックホーで徐々に掘り下げながら、土層の堆積状況や遺物の出土状況を確認しながら、周辺の遺跡で遭検出面となる青灰色、もしくは灰白色のシルト層まで掘り下げることした。試掘トレンチは2ヶ所で、TP1は操作室の基礎部分の坂田川寄りに設定し、TP2は仮排水路と管理用道路の交点付近とした。トレンチの規模は、幅を法面パケットの幅に合わせて約1.5mとし、長さは約3mとした。調査対象面積は約300m²で、トレンチ2ヶ所を合計した調査面積は10.08m²である。

基本層序 両トレンチが近接しており、混入物の様相が若干異なるが概ね類似した土層の堆積状況であった。基本土層は大きく5層に分類した。第Ⅰ層は休耕田の現表土で、褐色粘土からなる耕作土を主体とする。第Ⅱ層は水田床土の灰色粘土層で、酸化した鉄分が多量に含まれる。第Ⅲ層は灰色粘土を主体と

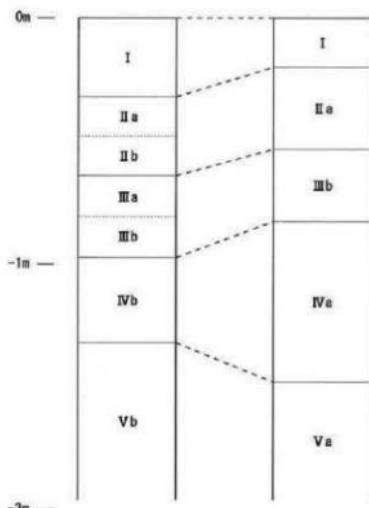
する自然堆積層で、やや大きめな青灰色シルトのブロックを含む第Ⅲa層と灰色砂や礫を含む第Ⅲb層に細分した。第Ⅳ層は河川堆積層とみられる灰色砂層で、腐植物を含む第Ⅳa層と礫を含む第Ⅳb層に分かれる。第Ⅴ層は腐植物を含む灰褐色粘土層で、当地域で多く見られる湿地の痕跡とみられる層である。

TP1 現在の坂田川から約7m離れる。地表下約70cmで検出した第Ⅲ層から遺物は出土しなかった。堆積の厚さは30cm程度で、a・b層に分かれた。両層ともに炭化物の混入も認められない。その下位で第Ⅳ層を検出した。径3cm程度の礫が主体となる砂礫層であり、旧河川痕であると判断したが、河川内の施設や、祭祀などに伴い廃棄された遺物が含まれていることも想定されたので、掘り下げを継続した。しかし、第Ⅳ層はしまりが弱く、地表下約1.3mまで掘り下げたところで、壁面の一部が崩落し始めた。危険なため、この段階で土層の観察や記録作成を行なった後に、トレンチの半分をさらに掘り下げていった。第Ⅴ層を確認したが、青灰色層を確認しようとさらに地表下2m付近まで掘り下げたものの、基底部に到達はしなかった。この間、遺物の出土も確認できず、これ以上の掘削は危険であると判断して、TP1の調査を終了した。

TP2 TP1とは約10m離れた位置である。基本土層はTP1と同じである。第Ⅱ層から第Ⅳ層の上面はTP1に比べて10cm前後浅く、第Ⅴ層の上面はやや深い。また、第Ⅴ層に含まれる腐植物はTP1に比べるとやや多くなっている。第Ⅱb層・第Ⅲa層は確認されなかった。第Ⅳ層に礫はほとんど含まれず、腐植物が多く含まれており、同様の堆積をしているが若干の差を見出せる。第Ⅴ層を含めて地表下1.7m程度まで掘り下げたものの遺物は出土せず、TP1同様の状況を確認したため、調査を終了した。

4 調査のまとめ

以上の通り、今回の調査対象地では遺構・遺物とともに確認することはできなかった。土層の観察では、第Ⅳ層が砂を主体として円礫を多く含んでいることから、坂田川の旧流路の堆積であると判断した。現在の坂田川は調査地の対岸の低位丘陵間に湾曲している。おそらく、旧来の坂田川は現在よりも南側を流れしており、徐々に低位丘陵を浸食しながら流れを変えたのであろう。周辺には多くの遺跡が見つかっており、そこから廃棄されたり、流れ込んだ遺物が含まれているとも考えたが、全く出土しなかった。今回の試掘調査は対象範囲がごく限られたものであり、この結果を以て坂田遺跡の範囲を限定することはできない。今後も必要に応じて周囲の状況を調査していく、埋蔵文化財の保護に努めることが重要である。



第4図 坂田地区試掘調査 土層柱状模式図
(S=1:20)

III 女谷・市野新田遺跡群（第3次）

柏崎周辺（二期）農業水利事業に伴う市野新田ダム仮排水路工事・
同ダム本体工事・市道柏崎21-168号線付替工事等に係る試掘調査

1 調査に至る経緯

柏崎市鶴川地区は、市街地から南へ約14kmの位置にある山間地である。地形的には、鶴川上流域の盆地状地形にある。農林水産省北陸農政局柏崎周辺農業水利事業所を事業主体とする柏崎周辺（二期）農業水利事業は、鶴川地区でも計画が進められており、埋蔵文化財に関する協議も行われている。

柏崎周辺（二期）農業水利事業とダム貯水域・市道柏崎21-168号線付替工事等 鶴川地区における同事業の内容は、市野新田ダムの新設および関連する諸工事である。埋蔵文化財の試掘調査・確認調査は、平成20年度から実施されており、今回の調査が第3次となる。第1次は市野新田地区における市道柏崎21-132号線付替工事に係る試掘調査、第2次は女谷地区における幹線導水路工事に係る確認調査である。各工事の内容や周辺地区的環境および調査の内容については、報告書〔柏崎市教委2010・同2011〕が刊行されているので、参照されたい¹⁾。

第3次調査で対象となるのは、市野新田ダムの貯水域（ダム湖・水没区域）およびダム本体・仮排水路・市道柏崎21-168号線付替などの各工事用地である。同ダムは、ゾーン型フィル形式で、規模は堤高26.7m、堤長190.0m、堤体積25.1万m³、米山層の凝灰岩類を基礎地盤とし、総貯水量169万m³、有効貯水量160万m³が計画されている。水の確保は、ダム上流部からの直接取水（流域面積1.2km²）と尾神岳・兜巾山からの間接取水（流域面積2.7km²）による²⁾。貯水域の面積は196,000m²で、堤体部分および堤体施工中の仮排水路部分が掘削を受ける。また、現在の市道柏崎21-168号線も水没することから、貯水域を迂回するように付替えられる。同市道付替工事は、延長935m、幅員8.25mが計画されている。丘陵斜面への付替えとなるため、必要に応じて広い法面が生じるので、平均幅員は25m、施工面積は22,500m²となる。したがって、貯水域と付替市道用地の合計約218,500m²が調査対象区域となった。

第3次調査に至る経緯 原因事業に係る埋蔵文化財に関する協議は、平成15年度から開始している。柏崎市教育委員会（以下、「市教委」と略）は、平成15年11月18日に市の担当部署である産業振興部国営土地改良事業推進室（現在は農林水産課で所管）と協議し、同月20日に現地確認を行った。事業主体者とは同月25日に協議を行い、12月4日に現地の案内を受けた。しかし、その後は事業全体に進捗がみられなくなったことから、埋蔵文化財に関する協議も実質的には中断となった。再開は平成20年度となったが、第1次・第2次調査で対象となった市道柏崎21-132号線付替工事・幹線導水路工事が中心的に行われたので、貯水域と市道柏崎21-168号線付替工事に関する協議は平成22年度となった。

平成22年4月27日、事業主体者からスケジュールが提示され、5月21日に施工区域の案内を受けた。これにより、市教委では現地踏査と試掘調査実施区域の選定を行った。同年6月2日付け22柏事第123号で事業主体者から埋蔵文化財の調査を正式に依頼された。同年6月4日付け教総第534号で新潟県教育委員会教育長へ埋蔵文化財発掘調査の報告を行い、同月8日に調査に着手した。

2 調査の概要

1) 調査区域の選定と調査の方法

第3次調査の目的は、ダム貯水域と市道柏崎21-168号線付替工事用地における遺跡の存在について確認することである。さらに、遺跡が存在した場合には、今後の取扱いに関する資料とするためのデータを得ることとなる。

現地踏査と試掘調査実施区域の選定 調査対象区域（合計約218,500m²）は広大な範囲である。また、急斜面など、遺跡が立地する可能性が低い区域もあり、実際に試掘調査を実施する区域を選定する必要があった。現地踏査は5月下旬～6月上旬に実施し、試掘調査の期間中も必要に応じて行った。

調査対象区域は、鶴川支流の石橋川とそれに集約される小河川によって形成された沢地形にある。北東側から南西側へ流れた後に南東側へ向きを変えるため、全体的には「く」の字状を呈している。調査対象区域の南東端は、北東側・南西側から丘陵が迫っており、沢の開口部はかなり幅が狭くなっているため、沢の南半は盆地状を呈している。石橋川は、この狭い開口部を抜けた後に、鶴川へと合流する。原因事業ではこの地形を利用してダムの貯水区域とし、開口部に堤体を設ける計画である。

盆地状地形は、幅（南西～北東）100～150m、延長（北西～南東）400～450mほどの規模である。周辺は急斜面によって囲まれ、低地は湿地状態である。雜木や雜草が生い茂り、詳細な地形観察や遺物の散布状況を確認することができなかった。また、比較的緩やかな丘陵の尾根筋も踏査したが、塚なども確認できなかった。しかし、南西側の左岸には扇状地帯、中央部の右岸には段丘状を呈する区域があり、遺跡が立地する可能性が考えられた。これらをそれぞれA地区・B地区とする。この2地区以外にも平坦面を有する区域が認められたが、幅が狭く、遺跡の立地を想定し難いものであった。したがって、実際の試掘調査の実施区域としては、A地区・B地区的2ヶ所を選定した。

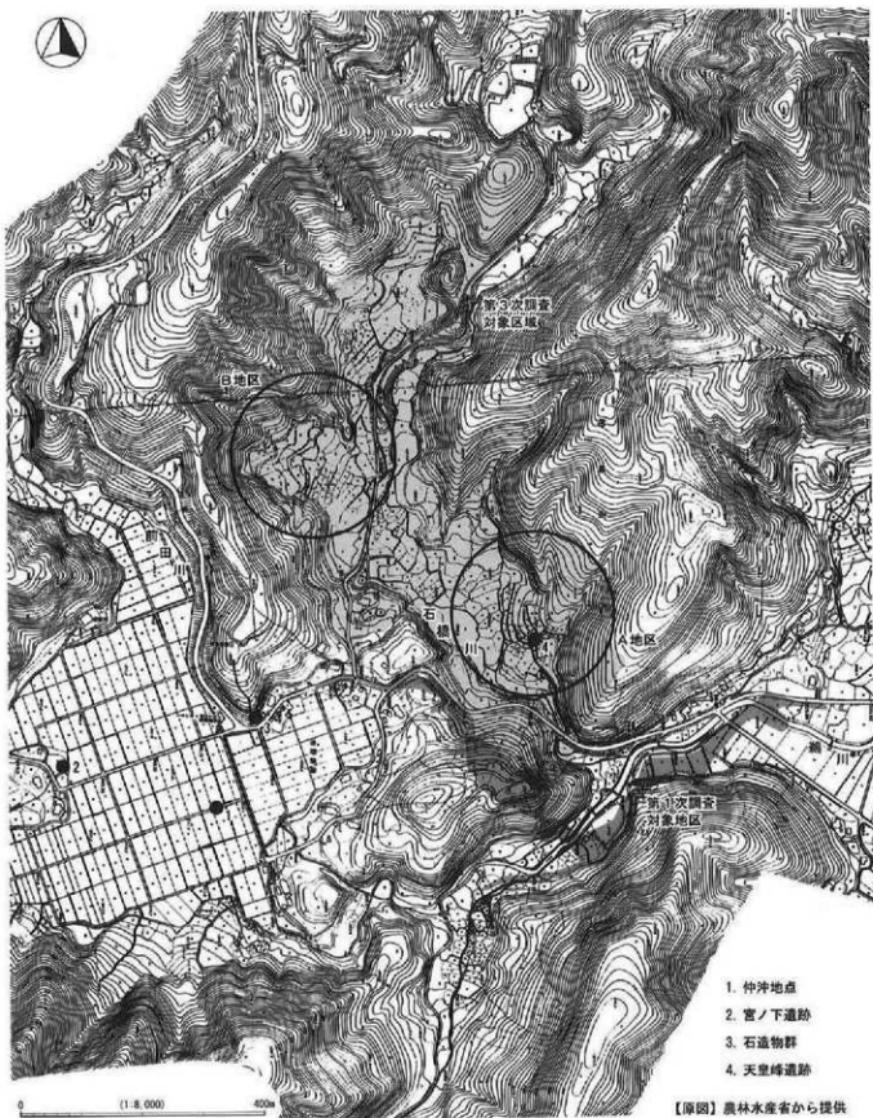
調査の方法 試掘調査では、A地区・B地区について任意の試掘坑を設定し、重機（バックホー 0.25m³級）で発掘していった。試掘坑は、土層や遺物の出土に注意しながら掘り下げていき、遺構の有無などを確認した。土層については、試掘坑の壁面にて観察する。そして、これらを撮影・記録していく。終了後、試掘坑はその日のうちに埋め戻すこととした。試掘坑の名称については、地区ごとに調査順に算用数字で表すが、地区名を冠して「A-1 試掘坑」とする。

2) 調査の経過と試掘坑の概要

試掘調査は、平成22年6月8～14日に実施した。ただし、初日の8日は重機の進入路を確保するための作業のみとなつたため、実質的な調査は9～14日の4.0日間となった。調査員は、調査担当を含む2名なので、延べ8.0人を要したことになる。試掘坑は合計28ヶ所で、面積は約577.2m²である。これは調査対象区域約218,500m²の約0.3%にあたる。ここでは、地区ごとに概要を説明する。

a. A地区

石橋川左岸に形成された扇状地で、かつては一帯に階段状の水田（棚田）が展開していた。面積はおよそ8,000m²である。調査は、6月9～11日の3.0日間で実施した。試掘坑は合計22ヶ所で、面積は計527.8m²である。これは本地区で調査対象とした面積の約6.6%にあたる。



【原図】農林水産省から提供

第5図 市野新田地区の遺跡と試掘調査対象区域

① 調査の経過と試掘坑の概要

6月9日（水）：A-1試掘坑～A-9試掘坑 晴天で日射しも強かった。午後からはやや風もあったが、気温は高いままだった。

A-1試掘坑から着手する。南端では深度約1.3mまで深掘りし、土層を観察した。遺構確認面は褐色土層（第IV b層）上面とし、以後は棚田状になっている縁の部分に対し、長い延長を持つ試掘坑を発掘していった。午前はA-1～A-5試掘坑を発掘したが、遺構・遺物は検出されていない。

午後、A-6試掘坑を発掘した。試掘坑北側に溝跡2条（SD-1・5）ピット3基（SKp-2・3・4）を確認した。土層を観察したところ、地山土層の直上に耕作土層があり、地山土は削平を受けているようであった。SD-1は耕作土層直下で、遺物も出土しないことから、時期も不明である。SKp-2・3・4は榦架木の痕跡とも考えられたが、判断できなかった。また、試掘坑の中央付近には、焼土坑（SX-6）がみられた。上段の水田にA-7試掘坑を発掘したが、遺構は検出されなかつた。

A-6試掘坑の下段にA-8試掘坑を発掘した。ピットが2基（SKp-7・8）検出された。ここでも耕作土層は2層（第I・II層）あったが、地山土層（第IV b層）には漸移層（第III層）が残っていた。

さらにその下段に、A-9試掘坑を発掘した。試掘坑の北半に、溝跡（SD-9）がみられた。付近には地山漸移層（第III層）はみられず、古い耕作土層（第II層）の下が地山土層（第IV b層）となった。SD-9は第II層直下の第IV b層上面からら掘り込まれている。遺物包含層や遺構上面などは削平を受けている可能性が高く、遺構の時期は不明である。しかし、近世以前の所産である可能性はあるだろう。

6月10日（木）：A-10試掘坑～A-17試掘坑 本日も晴天で、日射しが強かった。遺構の北側への広がりを確認することを目的とし、まずはA-10～A-14試掘坑を設定した。

A-10・A-11・A-12試掘坑では、遺構はみられなかつた。地山土層（第IV b層）は、旧耕作土層（第II層）の直下で検出された。地山土層（第IV b層）は、A-10試掘坑ではシルト質であったが、A-11・A-12試掘坑では粘土質であった。また、A-11・A-12試掘坑では、灰褐色土に黄色地山土粒・塊が混じる土層が複数みられた。これは旧耕作土層（第II層）の一部である可能性がある。棚田を切り直した痕跡であろうか。

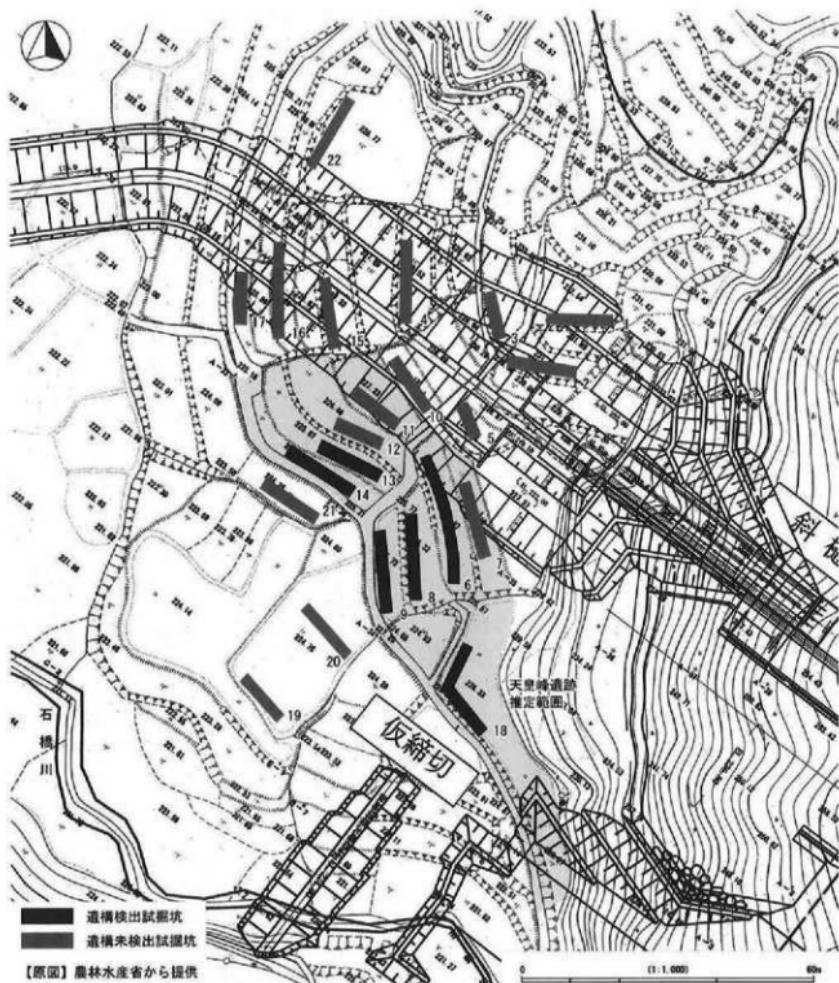
A-13試掘坑では、土坑1基（SK-10）・ピット2基（SKp-11・12）が確認された。やはり旧耕作土層（第II層）直下に地山土層（第IV b層）があり、遺構は地山土層上面からの掘り込みである。A-14試掘坑では、ピット3基（SKp-13・14・15）が確認された。遺構がみられるのは、いずれのトレンチも南半であった。地山土層（第IV b層）はやや粒子の粗い粘土質で、湧水がみられた。葦根が著しい。

さらに北側を確認するため、A-15・A-16・A-17試掘坑を設定した。この付近には遺構は分布しないと想定し、棚田の1段置きに試掘坑を設定した。結果的に遺構は確認されていない。土層もやはり、耕作土直下から地山土層がみられた。

6月11日（金）：A-18試掘坑～A-22試掘坑 本日も晴天で、日射しが強かった。南側・西側への遺構の広がりを確認する。

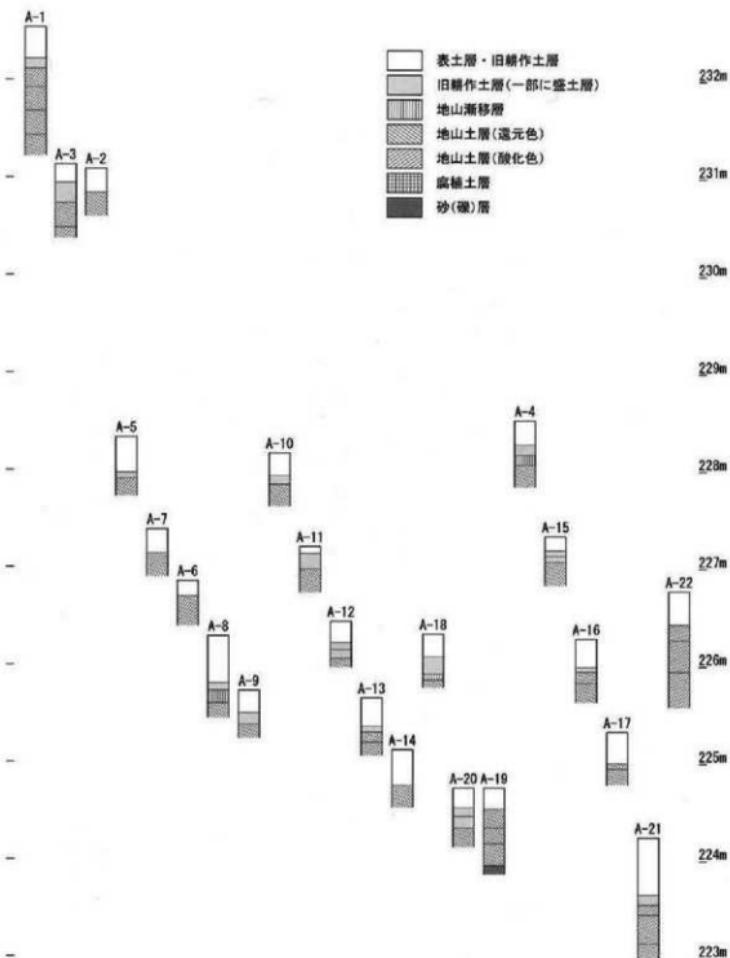
まず、南側への広がりを確認するため、A-18試掘坑を発掘した。南半から溝跡（SD-16）が検出された。なお、東半の地山土は、東側（沢の上流側）から疊（径約20cm）の混じる灰白色粘土層、そして灰白色粘土層となり、南半では橙色粘土層となっていた。当初は上流側が高い斜面となっていたものが、水平に削平されたものとみられる。

次に、西側への広がりを見るため、A-19・A-20・A-21試掘坑を設定した。A-19試掘坑は、舌



第6図 女谷・市野新田遺跡群第3次試掘調査 A地区試掘坑配置模式図

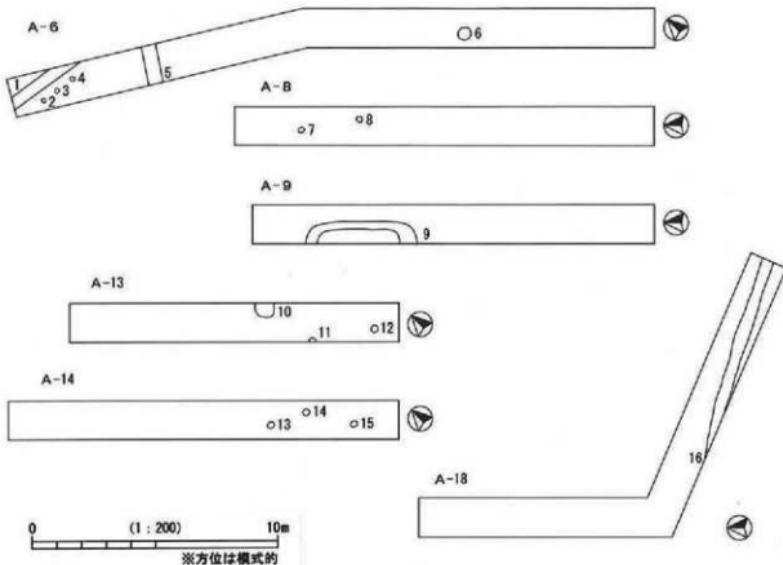
状に張り出した尾根の先端となるが、耕作土層（第I層）直下に地山土層（第IV b層）があり、造構はみられなかった。さらに掘り下げるに従って、赤褐色を呈した砂層（第VI層）となった。斜面上方に戻ったA-20試掘坑では、耕作土層（第I・II層）が3枚みられたが、その直下はやはり地山土層（第IV b層）であった。造構は確認されていない。A-21試掘坑では、青灰色を呈した粘土層（第IV a層）があり、北側へ標高を下げていった。北西側へと向かう沢があったことが考えられる。



第7図 女谷・市野新田遺跡群第3次試掘調査 A地区土層柱状模式図

最後に、A-22試掘坑を発掘した。北側の平坦面を確認するためである。すでに遺構の範囲は及んでいないとみられていたが、周囲よりも面積が大きい水田跡であったため、急のために確認することとした。しかし、表土の直下は青灰色粘土層（第IV a層）となっていた。一部を深掘りしたが、深度約1mほどまで続いている。これも沢の堆積層とみられる。遺構は確認されていない。

以上で、A地区の調査は終了とした。



第8図 女谷・市野新田遺跡群第3次試掘調査 A地区検出遺構模式図

② 土層の概要

確認された土層を集約すると、第Ⅰ層・第Ⅱ層・第Ⅲ層・第Ⅳa層・第Ⅳb層・第Ⅵ層に分類される（第Ⅴ層は欠番）。

第Ⅰ層は、（暗）灰褐色・褐灰色・暗灰色などを呈している。表土となる層で、棚田状となった水田の耕作土層であった。第Ⅱ層は、暗褐色・黒褐色もしくは暗茶褐色・灰褐色・灰色・暗灰色を呈する。前者は棚田造成以前の旧耕作土層、後者は地山土塊などが含まれているので、盛土層と考えられるが、一括した。第Ⅲ層は、暗灰白色などを呈する地山土層（第Ⅳb層）の漸移層である。第Ⅳa層は、青灰色といつた還元化した地山土層である。第Ⅵ層は赤褐色砂層である。第Ⅳb層は、黄褐色・橙色・黃白色など酸化色を呈する地山土層である。おおむね粘土質であるが、A-10試掘坑などの黄白色となる試掘坑ではシルト質を帶びている部分もある。

遺構が分布する区域（A-6・8・9・13・14・18）とその斜面上方では、おおむね第Ⅰ層・（削平されていなければ第Ⅱ層・第Ⅲ層）・第Ⅳb層の堆積がみられた。第Ⅳb層が第Ⅰ・Ⅱ層の直下にあるなど、遺物包含層を確認することはできなかった。これは、水田造成の際に削平されたものと考えられる。

A-21・22試掘坑付近では、遺構が分布する区域の周辺にあたり、1段低い地形になっている。ここでは第Ⅳa層が堆積しており、沢状地形となっていたことをうかがうことができた。さらに、南西側への張り出し部先端のA-19試掘坑では、第Ⅵ層がみられた。直下は段丘上となっており、かつての石橋川を知ることができよう。

③ 遺構の概要

遺構は、ピット類10基、土坑2基、溝跡4条、合計16基が確認された。周辺も含め、いずれの遺構からも遺物は発見されていないため、時期を特定することができなかった。

ピット類はA-6・8・9試掘坑の北西側、A-13・14試掘坑の東側に集中している。SKp-2・3・4が直線的に配置しているが、建物跡などの判断は今のところ難しい。

土坑のうちSX-6は焼土坑である。径45cmほどで、製炭遺構としては焼土が小規模であり、立地にも疑問があることから、一時的な野焼きなどに伴うものと思われる。他のSK-10は、南北辺が76cm、確認された東西辺が65cmである。覆土は灰色粘土と黄褐色土塊の混合土層で、粘性・締まりがある。

溝跡は、SD-1・5・16は直線的である。しかし、確認されたSD-9は「コ」の字状を呈しており、試掘坑の西側に延長するが、方形となる可能性もある。その場合、1辺3.8mとなる。

④ 小 結

A-6・A-8・A-9・A-13・A-14・A-18試掘坑で遺構が確認されたので、この周辺を遺跡として周知化することとなった。名称は、小字名から「天皇峰遺跡」とした。しかし、遺物包含層が確認されず、全体的にも遺物が出土しなかったことから、遺跡の時期は不明となった。ただし、遺構の覆土にはある程度の締まりがあった。また、地元住民からの聞き取りによれば、かつてA地区は水田として利用されていたが、今回の調査で検出された遺構と結びつくような土地利用はなかったようである。これは近現代の状況と考えられることから、検出された遺構は前近代の所産である可能性が考えられよう。

b. B地区

石橋川右岸の丘陵裾部にみられる緩斜面である。かつては水田となっていた。面積はおよそ4,000m²である。大小の沢による浸食を受けているので、平坦面を選定して試掘坑を発掘した。試掘坑は合計6ヶ所で、面積は計約49.4m²である。これは本地区で調査対象とした面積の約12%にある。

① 調査の経過と試掘坑の概要

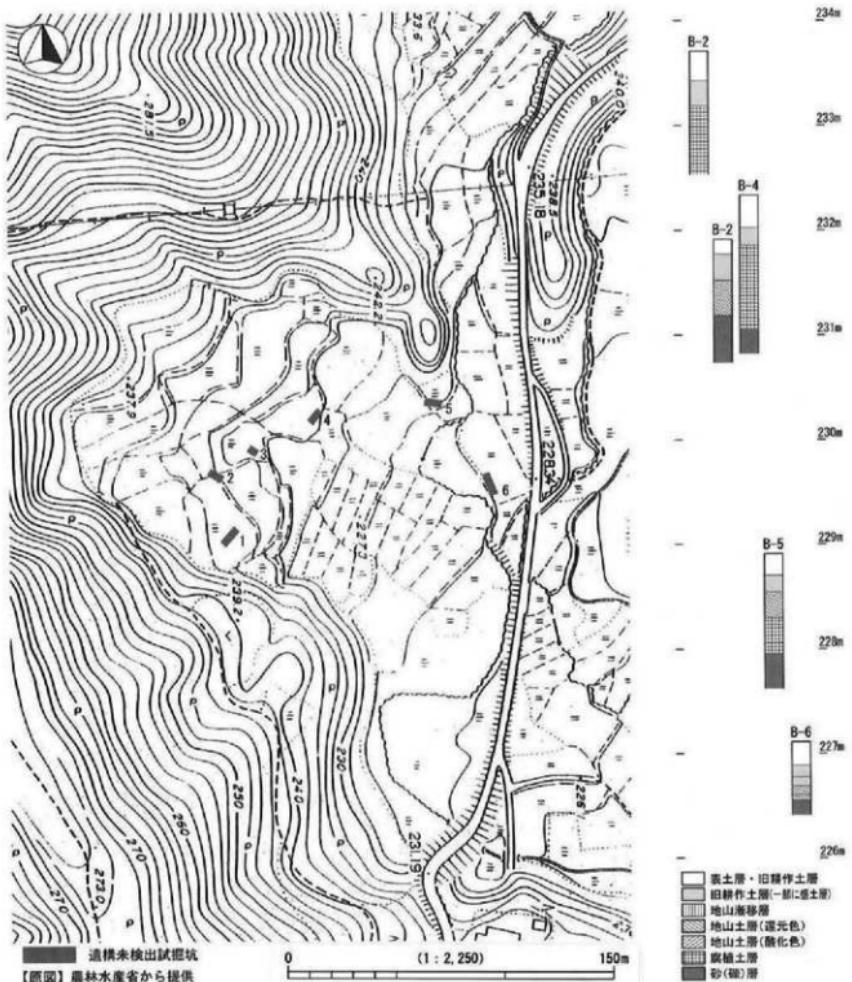
6月14日（月）：B-1試掘坑～B-6試掘坑 早朝までに比較的強い降雨があったが、日中は曇天で、日が射す時間帯もあった。本日からB地区の調査を行う。朝から打合せと準備を行い、午後から調査に着手し、明日の終了を予定していた。しかし、午前のうちに調査を開始することができたので、本日中に調査を終了することができるようになった。また、事業主体者と調査用重機の業者と打合せをした際、事業主体者から、調査対象区域内に希少種の植物があるとの説明を受けた。生息が確認されている区域に注意し、調査を進めていった。

試掘坑は、沢に挟まれて舌状に張り出した尾根の平坦面に設定していった。尾根の中央付近は南東方向へ向かう沢地形となっているが、沢の右岸（西）側にB-1～B-3試掘坑、左岸（北～東）側にB-4～B-6試掘坑を発掘した。しかし、結果的には遺跡の痕跡はみられなかつた。

② 土層の概要

確認された土層は、第Ⅰ層（表土層・耕作土層）・第Ⅱ層（盛土層）・第Ⅳb層（酸化した地山土層）・第V層（腐植土層）・第VI層（砂層）に分類される。遺物包含層は確認されなかつた。

B-1・B-3・B-5・B-6試掘坑で第Ⅳb層がみられるものの、腐植土が含まれている。その下には厚い第V層が堆積しているため、長らく湿地状の環境となっていたと考えられる。さらに第V層の下は第VI層となっており、石橋川やその支流の流路であったと思われる。



第9図 女谷・市野新田遺跡群第3次試掘調査 B地区試掘坑配置模式図

【原図】農林水産省から提供

③ 小結

調査の結果、遺構・遺物を確認することができなかった。そのため、B地区には遺跡は存在しないと判断された。

第10図 女谷・市野新田
遺跡群第3次試
掘調査 B地区
土層柱状模式図

3 調査のまとめ

調査の原因となった事業の用地は広大な範囲であったが、事前の現地踏査によって実際の調査対象区域を絞り込み、試掘調査を実施した。その結果、A地区において天皇峰遺跡を新発見することができた。市野新田地区を含む鶴川地区においては、試掘調査で遺跡が新発見され、周知化に至った初の事例となった。同遺跡は、全城がダムの貯水域となるため、事前に本発掘調査の実施が必要となる。試掘調査では遺跡が営まれていた時期を明確にすることはできなかったが、これらについては本発掘調査の成果に期待したい³⁾。

なお、鶴川地区では国指定の重要無形民俗文化財（民俗芸能）である「綾子舞」を伝承している。しかし、中世以前の歴史については断片的な資料が残されているのみである。今後、地域の歴史が語られていく上で、天皇峰遺跡の調査成果も活用されることができれば、遺跡が新発見された意義は大きいといえよう。

註

- 1) 同報告書で触れられなかった中世史料として、「高野山清淨心院『越後過去名簿』（写本）がある。これには、1521年（永正18）8月8日に「カリハ ナタ 谷村 大野」の「道塚・那智」の供養が依頼されたという記録がみられる〔山本2008〕。
- 2) 事業主体者が作成した「柏崎周辺地区国営農業水利事業概要 自然を活かした効率的な生産基盤づくり」（2003年3月作成）などによる。
- 3) 本発掘調査は、平成23年度に実施されている。その結果、溝跡やピット類が検出され、遺物も珠洲焼の跡などが出土した。

其番号	総長 (m)	幅 (m)	面積 (m ²)	土壤	sondage (m)			備考
					Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	
A- 1	12.0	1.6	19.2	I 残根状土 II 残根状土 IV b (暗)褐色土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				
A- 2	13.0	1.6	21.3	I 残根状土 II (暗)褐色土 III 残根状土 IV b (暗)褐色土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				
A- 3	9.0	1.6	14.4	I 残根状土 II 残根状土 III 残根状土 IV b (暗)褐色土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				
A- 4	16.8	1.6	26.9	I 残根状土 II 残根状土 III 残根状土 IV b 残根状土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				
A- 5	7.8	1.6	12.5	I 残根状土 II 残根状土 IV b (暗)褐色土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				
A- 6	20.5	1.6	32.8	I 残根状土 II 残根状土 IV b (暗)褐色土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土	3	1	2	本発掘調査対象
A- 7	15.0	1.6	24.0	I 残根状土 II 残根状土 IV b (暗)褐色土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				本発掘調査対象
A- 8	17.0	1.6	27.2	I 残根状土 II 残根状土 IV b (暗)褐色土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土	2		2	本発掘調査対象
A- 9	16.5	1.6	26.4	I 残根状土 II 残根状土 IV b (暗)褐色土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土		1	1	本発掘調査対象
A- 10	12.5	2.5	31.3	I 残根状土 II 残根状土 IV b (暗)褐色土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				
A- 11	11.5	1.6	18.4	I 残根状土 II 残根状土 IV b (暗)褐色土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				本発掘調査対象
A- 12	10.0	1.6	16.5	I 残根状土 II 残根状土 IV b (暗)褐色土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				本発掘調査対象
A- 13	13.5	1.6	21.6	I 残根状土 II 残根状土 IV b (暗)褐色土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土	2	1	3	本発掘調査対象
A- 14	16.0	1.6	26.6	I 残根状土 II 残根状土 IV b (暗)褐色土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土		3		本発掘調査対象
A- 15	16.2	1.6	25.9	I 残根状土 II 残根状土 IV b (暗)褐色土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				
A- 16	20.0	1.6	32.0	I 残根状土 II 残根状土 IV b (暗)褐色土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				
A- 17	11.0	1.6	17.6	I 残根状土 II 残根状土 IV b (暗)褐色土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				
A- 18	22.0	1.6	35.2	I 残根状土 II 残根状土 IV b (暗)褐色土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土		1	1	本発掘調査対象
A- 19	11.4	1.6	18.2	I 残根状土 II 残根状土 IV b (暗)褐色土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				
A- 20	12.0	1.6	19.6	I 残根状土 II 残根状土 IV b (暗)褐色土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				
A- 21	13.0	1.6	20.8	I 残根状土 II 残根状土 IV b (暗)褐色土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				
A- 22	16.0	1.6	25.6	I 残根状土 II 残根状土 IV b (暗)褐色土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				
小計			527.8		10	2	4	16
B- 1	0.2	1.6	0.3	I 残根状土 II 残根状土 IV a 残根状土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				
B- 2	4.7	1.6	7.5	II 残根状土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				
B- 3	3.0	1.6	4.8	I 残根状土 II 残根状土 IV b 残根状土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				
B- 4	5.0	1.6	8.0	I 残根状土 II 残根状土 IV b 残根状土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				
B- 5	5.5	1.6	8.8	IV b 残根状土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				
B- 6	6.5	1.6	10.4	I 残根状土 II 残根状土 IV b 残根状土 V 黄褐色土 VI 黑褐色土 VII 黄褐色土 VIII 黄褐色土				
小計			49.4		0	0	0	0
合計			577.2		10	2	4	16

第2表 女谷・市野新田遺跡群第3次試掘調査 試掘坑集計表

IV 別俣地区（第1次）

- 県営中山間地域総合整備事業（別俣地区）に伴う試掘調査 -

1 調査に至る経緯

別俣地区は、柏崎市街地から南へ約9kmに位置する地区である。地形的には黒姫山から北に派生する丘陵が広がる地域であり、鶴川支流の上条芋川には沖積地が形成され、水田が広がっている。

今回の試掘調査の原因となった事業は、新潟県営中山間地域総合整備事業（別俣地区）である。面積約100,000m²の水田に対しは場整備を行う計画で、水田以外にも道路や水路等の付随工事も実施される予定である。当該地には周知の遺跡は所在していなかったが、施工面積が広大な大規模事業であることから、工事の事前に試掘調査を実施して、埋蔵文化財の有無等を把握することとし、柏崎市教育委員会（以下、「市教委」と略）と事業主体者の新潟県（地域整備振興局 農業振興部 農村整備課）で協議を行った。そして、当該地ではすでに稻作が行われていたため、試掘調査の実施時期を平成22年の秋頃（稲刈り後）として準備等を行っていった。

しかし、事業面積が広大であるため、短期間で全域の試掘調査を実施することは困難であった。そのため、今回は平成22年度から平成23年度にかけて実施する予定の盛土工事部分を対象に、第1次試掘調査として行う方針とした。対象となる範囲は、当該事業予定地内の北端付近に相当する地点である。周囲の水田よりも標高が低いため盛土がなされるのであるが、地形的にも旧河道や沢等に相当する可能性が高い地点であった。そして、それ以外の地点については、平成23年に改めて試掘調査を実施して、遺跡の有無等を把握することで協議が成立した。

当初は上述の盛土工事部分全域と、その工事に伴う作業用仮設道路部分を試掘調査対象とする予定であったが、事業主体者が試掘調査に係る土地所有者の承諾を得た地点は、限定期的なものとなってしまった。

平成22年10月19日付け教総第572号により、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告を提出し、試掘調査に着手した。

2 試掘調査

1) 調査の経過と概要

今回の試掘調査対象地は、平成22年に盛土の仮置き場として施工する地点のうち、土地所有者の同意が得られた水田4枚分である。事業予定地の北側に位置し、面積は約4,000m²である。やや離れた位置に分散しているため、東から順にA～C地区と呼称することとした。

試掘調査は平成22年10月19日の1日間で、調査担当及び調査員の計3名で実施した。重機（バックホー）を使用して任意に設定した試掘トレッチを掘削し、遺構・遺物の有無等を把握する方法で行った。試掘坑は7ヶ所を発掘し、合計で調査対象地の約0.75%に相当する約30m²の調査を行った。

A-1 A地区にはA-1試掘坑及びA-2試掘坑を設定して、試掘調査を行った。遺構や遺物は皆無

であり、遺物包含層に相当する可能性のある土層も認められなかった。現地表面から約105cmの深度で、地山粘土層（第Ⅲ層）が検出された。その土層上面が遺構確認面に相当すると判断して観察を行ったが、落ち込み等は見られなかった。

A-2 A-2試掘坑は、A-1試掘坑と同一水田の南端付近に設置した。A-1試掘坑と近似した様相であったが、地山粘土層（第Ⅲ層）は現地表面から約46cmの深度から検出された。A-1試掘坑よりも約59cm深度が浅いことから、北側に向かってやや急激に傾斜する地形であったと考えられる。A-1試掘坑と同様に、遺構・遺物ともに見られなかった。以上のことから、A地区は上条芋川に合流する沢に相当する地形であったと考えられ、遺跡が所在する可能性は低いと判断された。

B-1 B地区にはB-1試掘坑のみを設定し、試掘調査を行った。現地表面から約145cmの深度まで掘削を行ったが、地山に相当する土層（第Ⅲ層）を検出することは出来なかった。湧水が激しかったため試掘坑壁面の崩落の危険が高かったので、それ以上の掘削を断念した。本試掘坑でのみ第Ⅱ b層の堆積が見られたが、シルトよりもやや粗い粒子の粘質砂であり、上条芋川の旧河道堆積土に相当すると考えられた。遺構・遺物等も発見されず、B地区に遺跡が所在する可能性は低いと判断された。

C-1 C地区にはC-1～C-4の4つの試掘坑を設定し、試掘調査を行った。C-1試掘坑は、C地区の北端付近に位置する。現地表面から約40cmの深度において、地山粘土層（第Ⅲ層）が検出された。しかし、遺物包含層に相当する可能性がある土層は見られず、地山面においても遺構等の落ち込みは発見されなかった。

C-2 C-2試掘坑は、C-1試掘坑と同一水田の南端付近に設置した。C-1試掘坑と近似した様相であり、現地表面から約57cmの深度から地山粘土層（第Ⅲ層）が検出された。C-1試掘坑と同様に、遺構・遺物ともに見られなかった。

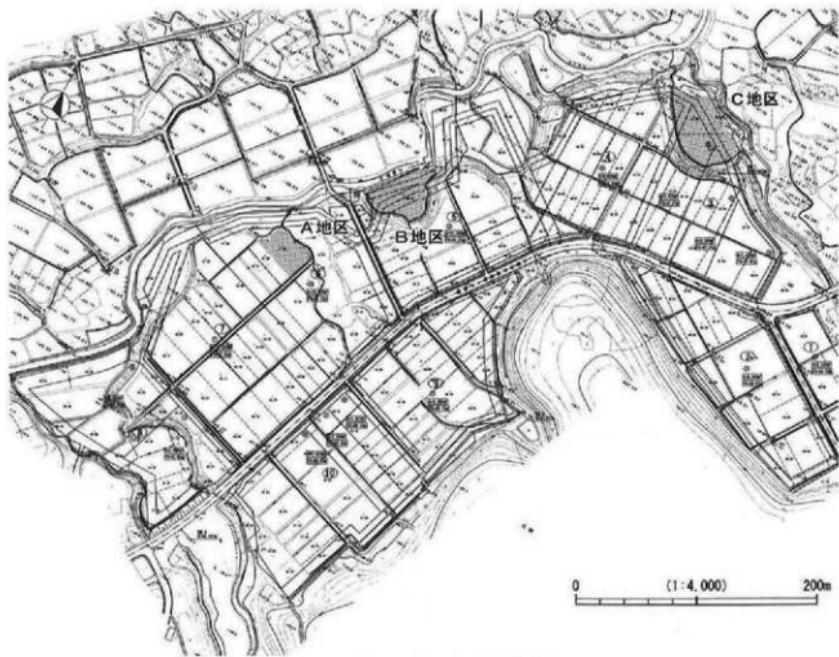
C-3 C-3試掘坑は、C-1及びC-2試掘坑を設定した水田の南側に接する水田南端付近に設定し、試掘調査を行った。C-1試掘坑等と近似した様相であったが、現地表面から約24cmの深度から地山粘土層（第Ⅲ層）が検出され、C-1試掘坑等を設定した水田よりも高い地形であったことが把握された。しかし、遺構・遺物等は皆無であり、未周知の遺跡の所在を示す痕跡は認められなかった。

C-4 C-4試掘坑は、C-3試掘坑と同一の水田の南端付近に設置して、試掘調査を行った。C-3試掘坑と近似した様相を呈し、現地表面から約48cmの深度から地山粘土層（第Ⅲ層）が検出された。また、遺構・遺物ともに見られなかった。以上のことから、C地区の地山粘土層（第Ⅲ層）は南側へ向かって傾斜しており、水田自体も周辺の地形との比高差約6mと急激に低くなっている位置にあることから、上条芋川に合流する沢に相当する地形であったと考えられる。地山粘土層（第Ⅲ層）が南側で低くなっている状況から、C地区南端の崖下に相当する部分を中心に流路があったことを想定することが出来よう。遺構・遺物等も発見されなかったため、遺跡が所在する可能性は低いと判断された。

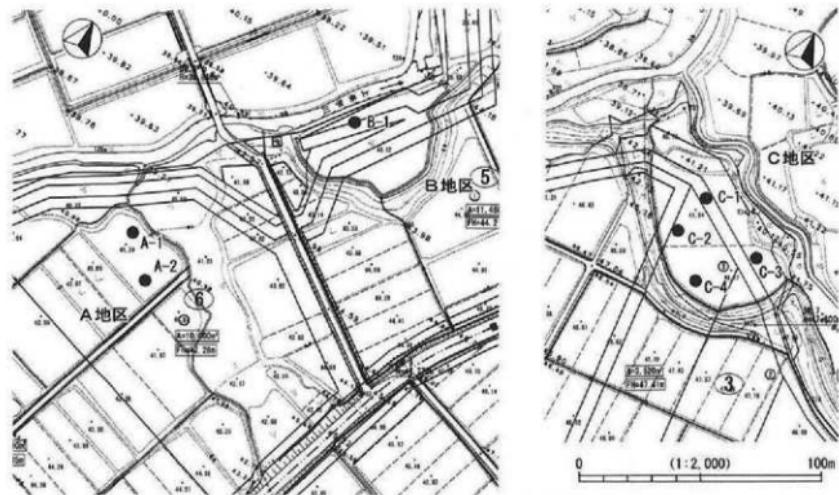
2) 基本層序

今回の試掘調査で観察された基本層序は、第Ⅰ層～第Ⅲ層に大別できる。

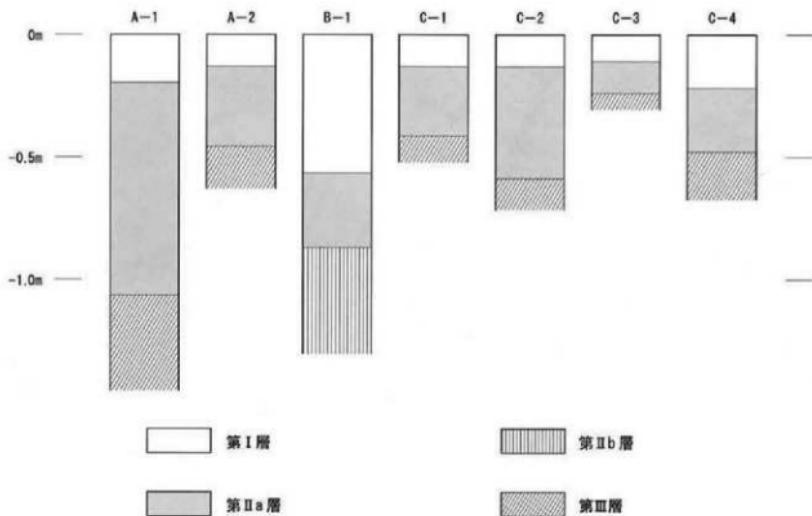
第Ⅰ層は現表土層で、水田の耕作土に相当する。第Ⅱ層は、第Ⅱ a層と第Ⅱ b層に細別される粘質土である。第Ⅱ a層は灰色粘質土で、第Ⅱ b層は灰色粘質砂である。第Ⅱ a層はすべての試掘坑で観察されたが、第Ⅱ b層はB地区でのみ見られた土層である。シルトよりもやや粗い粒子の粘質砂であり、上条芋川の旧河道堆積土に相当すると考える。第Ⅲ層は黄橙色粘土層で、地山に相当する。



第11図 別侯地区第1次試掘調査地区



第12図 別侯地区第1次試掘調査 試掘坑配置図



第13図 別俣地区第1次試掘調査 基本層序柱状模式図 (S = 1:20)

3 調査のまとめ

今回の試掘調査は、事業予定地内の北端部分に相当する地点を対象に実施した。事業予定地の北側には、鶴川支流の上条芋川が流れている。今回の調査対象地のうち、特にB地区とC地区は、周囲の水田と比べても低い位置にあり、当初から旧河道もしくは沢等に相当する可能性が考えられた。また、試掘調査を実施した時期との関係もあるだろうが、A地区についても、周囲と比較しての水田内の水量が多く、地形的に若干低くなっていることが見て取れる状況であった。試掘調査の結果からも、これらA～Cの3地区はともに旧河道もしくは沢等であったと考えられ、遺跡が存在する可能性は低いと判断された。

当該事業予定地内においては、南端付近が丘陵縁辺部に相当する地形となっている。そのため、仮に未周知の遺跡が所在するとすれば、地形的に南端付近である可能性が最も高いと考えられる。平成23年にも、第2次試掘調査を実施する方針とし、本報告書執筆時点では予定通り調査を終了している。その調査の詳細は今後の報告に委ねることとしたいが、結果的には遺跡の痕跡は認められず、今回の事業予定地に未周知の遺跡が所在する可能性は低いと判断されることとなった。

当該地の南東側に広がる丘陵上には、縄文時代を主体とする折渡遺跡と三ツ子沢遺跡が、中世～近世のものと考えられる仲島の塚等が所在する。しかし、今回の試掘調査の対象となった丘陵縁辺の様相は、ほとんど不明と言っても良いような状況であった。上条芋川流域の沖積地も含め、調査データが得られたことの意義は大きいであろう。

V 内郷遺跡群

- 中山間地域総合整備事業 西山内郷地区に係る試掘調査 -

1 調査に至る経緯

西山町内郷地区は柏崎市の北部の別山川流域の地域名称である。現在の西山町地域では小学校区が3ヶ所に分けられており、内郷地区は内郷小学校区に相当する。また、統合前の6小学校区は今でもコミュニティ活動などの地域区分において用いられており、その中川地区と別山地区を合わせた範囲が内郷地区となる。別山川は出雲崎町との境界付近の曾地丘陵から流れ出し、西山町地域から刈羽村を抜け、柏崎市大字上原地内で鈴石川に合流する2級河川である。別山川の両側には、曾地丘陵と西山丘陵がほぼ並行して南南西から北北東へ伸びているが、内郷地区付近では両者の間隔が大幅に狭まっている。これにより、当地域の大部分を山地が占めることとなり、また、独立した低位丘陵も点在する。このため、平野部で営まれる水田の区画は、山地や丘陵による制約と緩傾斜地に立地する制約を受けている。

このような制約を解消し、効率的な農業経営を行うことを目的に中山間地域総合整備事業 西山内郷地区が計画された。当事業については、事業採択を受ける前から柏崎市教育委員会（以下、「市教委」と略）も把握していたが、すでに実施されている他事業に伴う調査を優先していたため、埋蔵文化財包蔵地の詳細な把握には至っていないかった。市教委が事業主体者と当事業について最初の打ち合わせを行ったのは平成21年7月のこと、事業採択にむけた事前協議において、事業予定地における周知の埋蔵文化財包蔵地の有無について照会を受けたことによる。この時点では事業予定地における周知の埋蔵文化財包蔵地は田沢地内のワゴ遺跡が存在するだけであった。しかし、事業範囲はは場整備で31.5ha、その他に用排水路やため池などの工事もあり広大な範囲に及ぶため、事業実施前に分布調査や試掘調査を行って判断する必要がある旨を回答した。この段階では平成22年度の事業採択を見込んでいる状態であり、事業採択の見込みができる段階で、工事スケジュールなどと調整しながら調査を実施することとした。その後は事業主体者と随時連絡をとりながら、平成23年8月に事業採択されたことを受け、平成22年8月12日に工事担当者と事業計画や埋蔵文化財調査について詳細な協議を開始した。ここは、詳細設計を平成22年度中にを行い、平成23年度から順次工事を実施していく計画が示された。市教委は前回の協議と同様、事業を円滑に実施するためには、事前に埋蔵文化財の有無を把握するための試掘調査の実施が必要である旨を担当者に伝えた。

これを受けて、事業主体者となる新潟県柏崎地域振興局長は、平成22年9月10日付け柏振地農第0530号で市教委教育長へ試掘調査の実施を依頼した。しかし、事業範囲が広大なため、平成22年度は早期に工事に着手する見込みが高い範囲を抽出して、その範囲の試掘調査を行うこととした。工事担当者と現地で施工範囲等の確認を行い、当年度は平成23年度に施工の見込みがある甲戸地区・別山地区と伊毛地区の一部で調査を行うこととした。市教委はこれにより、調査準備に取りかかった。市教委教育長による文化財保護法第99条第1項の規定による新潟県教育委員会教育長への報告は、平成22年10月21日付け教総第574号で行った。

2 調査区と周辺の環境

今回の調査対象地は内郷地区の中で3ヶ所に分けられる。便宜的に甲戸地区、別山地区、伊毛地区とする。甲戸地区は大字別山字甲戸を中心に、字千刈・別山腰を含む国道116号線の東側一帯である。西側を除く三方を曾地丘陵の尾根に囲まれる。東側の尾根から別山川が流れ出し、河岸段丘を形成して地区の中央付近を西に向かって流れている。北側の低位丘陵は曾地丘陵と西山丘陵をつなぐように横たわっており、信濃川水系の島崎川との分水嶺を形成する。古代の行政区画においてもこの分水嶺が三崎郡と古志郡の境界となっていたと想定される。延喜式内社に比定されている多岐神社は、甲戸地区的北縁に鎮座する。別山地区は大字別山の字千刈・清水尻・釜田を中心とする範囲である。別山川の左岸の沖積地にあたり、やや甲戸地区に比べると平地が広くなっている。段丘の形成は顕著ではない。伊毛地区は事業対象地の南方の中川地区にあり、大字伊毛を対象とする。別山川右岸の西山丘陵に入り込む樹枝状の谷底平野が調査対象地である。伊毛は「イモ」と読み、「鉄物師」に通じるとされ、製鉄に関連した地名であるとの意見がある〔植木1997〕。内郷地区では周知の埋蔵文化財包蔵地は少ない。多くは、丘陵頂部や斜面に立地する縄文時代や弥生時代後期の集落跡や製鉄関連遺跡、山城、塚が主なもので、沖積地では平安時代の遺物散布地であるワゴ遺跡が知られる程度である。今回の調査対象地内では埋蔵文化財包蔵地の存在はこれまで把握されていない。

3 試掘調査

1) 調査の目的と方法

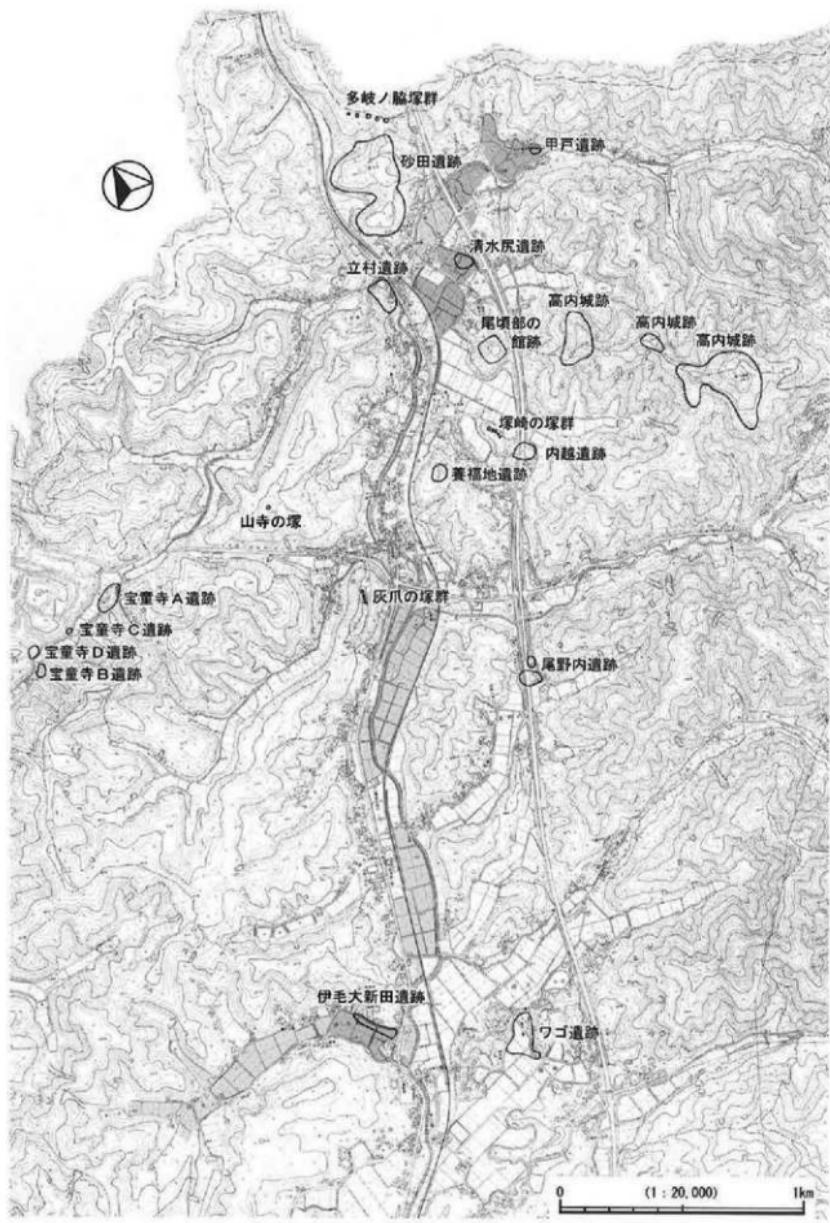
今回の調査では、事業予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無を把握すること、存在した際にはその範囲や包含層及び遺構検出面までの深度、遺物や遺構の密度などを把握することを主な目的とした。は場整備の詳細設計の前にこれらを把握することは、できる限り埋蔵文化財を保護する工法を取り入れることが可能だからである。また、現状保存ができない際には本発掘調査を行うための積算資料を得ることも目的であった。

調査トレンチは水田1区画に対して1ヶ所を設定することを基本とした。トレンチの掘削には法面パケットを装着した0.25m級のバックホーを用い、土層の堆積状況や出土遺物を確認しながら徐々に掘り下げていった。掘削深度は、遺構などが検出されない際には概ね1.5m程度までとした。トレンチの平面規模は幅をパケット幅の約1.5mとし、約3mの長さで掘削して平面積4.5m²前後を確保した。

調査は平成22年10月25日～平成22年11月4日に行った。調査対象面積は約127.800m²であり、51ヶ所のトレンチは面積の合計が約229.5m²である。これは調査対象面積の約0.2%にあたる。

2) 基本層序

確認された層序は最近行われた明らかな客土を除いて、大きく5層に分類した。客土は、その堆積順位にかかわらず全て第0層とした。水田面をかさ上げしたものや、今回のは場整備事業のために、あらかじめ他事業で生じた残土を搬入したものなどがある。第I層は表土以下の水田耕作に伴う堆積である。a層の表土・水田耕作土、b層を床土の2層に細分した。第II層は水田下の自然堆積層である。a層～g層の



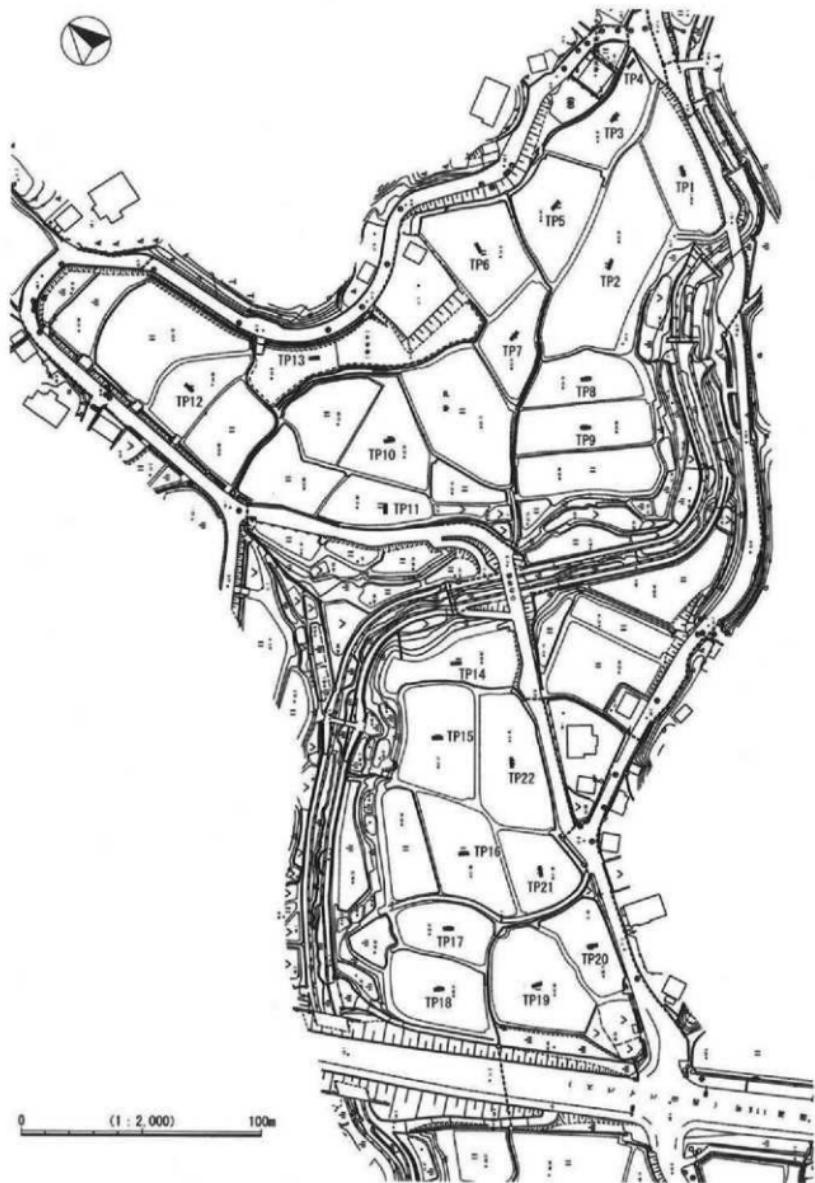
第14図 内郷遺跡群試掘調査 調査対象地と周辺の遺跡

7層に細分した。a層は灰色粘土層で、錆化した鉄分を多く含むことが多く、まだら状の橙色に変色した部分がみられる。b層も灰色を呈するがa層に比べるとやや色調が暗く、徐々に暗灰色に変移する。c層は灰褐色、d層は黄褐色を呈するシルト層である。e層は青灰色シルトのブロックが混入する灰色シルト層である。f層は暗灰色シルト層で、地点によっては炭化物を含んでいたと見られるが、遺物の包含は確認されなかった。g層は腐植物を含む褐色シルト層で、湿地の痕跡と見られるものである。第Ⅲ層は一部で遺物を包含する層で、3層に細分した。a層は暗褐色、b層は黒褐色、c層はブロック状の青灰色シルトが混じる黒褐色シルト層である。c層は第Ⅳ層への漸移的な層と捉えられる。第Ⅳ層は遺構検出面となる層で、青灰色を主体としたシルト層である。

3) 甲戸地区

甲戸地区ではTP1～TP22までの22ヶ所のトレンドチで調査を行った。甲戸地区は周囲の丘陵から別山川に向かっての傾斜が強く、調査地点の高低差は最大で7m以上である。現在は耕地整理により平坦な水田が並んでいるが、大部分は緩やかな斜面が続いているとみられる。今回の調査では別山川の両岸が対象となっており、右岸側の調査から開始した。TP1は別山川右岸の際に近く、下層で湿地性堆積の第Ⅱg層が検出され、その下位で第Ⅳ層が検出された。TP2からTP11では、第Ⅰ層から第Ⅳ層までを確認することができる。第Ⅳ層上面の標高は東から西にかけて徐々に下っており、北西側の尾根から別山川に向かって斜面が続いていると見て取ることができる。TP3は北側のやや急峻な斜面の傾斜が緩やかになつた平坦部の北縁近くに設定した。北側の甲戸集落開発センターと市道の部分の地形は改変されているとみられる。TP3の表土下約0.6mの所で、ほぼ全面に鉄滓類が堆積しており、製鉄関連遺跡に伴う排滓場であると判断した。これら鉄滓類を全て除去して第Ⅳ層を検出することは困難なため、一部で鉄滓を回収しながら掘り下げ、排滓層の堆積の厚さを確認するとともに、サンプルとして一部の遺物を回収することとした。鉄滓類の堆積は比較的薄く、約0.1m程度で第Ⅳ層を検出することができた。回収した鉄滓類は、多くのものに片面に焼土塊が付着していた。竪型炉のものと見られる炉壁片と考えられ、内面には流動状の溶着滓が付着している。この他、流動滓と炭がある。炉壁片の胎土は若干の砂がやや多く混ざり、1cm未満の長さのスサの痕跡も付いている。西山町地域では多くの製鉄関連遺跡が確認されており、これらの遺跡で出土したものと比較すると、炉壁の胎土は内越遺跡で出土したものに似ているようにみられる。内越遺跡で出土した羽口は13世紀代のものとみられる〔新潟県教委1983〕。TP3で検出された排滓層は、北側の斜面で操業された中世の半地下式竪型炉から生じた不要物を廃棄したものであると想定される。排滓層の範囲をある程度絞り込むと設定したTP4・TP5では排滓層は確認されなかった。排滓層の堆積の厚さなどから、排滓場の縁辺部に近い部分であった可能性がある。TP12では第Ⅱg層が検出され、北東から続いている谷底状地形に湿地帯が広がっていたことが想定される。別山川左岸では、TP14で第Ⅱg層が検出され、TP1と同様、別山川沿いが湿地帯になっていたことが想定される。この他のトレンドチでは、南西部の尾根から別山川に向かってなだらかに傾斜していた様子を窺い知ることができた。特に南西部の尾根附近では比較的傾斜が緩やかであるが、遺構・遺物とともに検出することはできなかった。

甲戸地区では、別山川沿いと北東部から続く谷地以外では遺物包含層に相当する第Ⅲ層が検出されたが、TP3の排滓層出土の遺物以外は、TP3の第Ⅰ層の近世磁器とTP8で磨滅した小土器片が出土した以外に遺物は確認できず、遺構も検出されなかった。



第15図 内郷遺跡群試掘調査 甲戸地区トレンチ配置図

4) 別山地区

TP 23～TP 44までの22ヶ所で調査を行った。調査は対象地の中央を南北に通る市道の西側から開始した。この部分は東側に比べて標高が低く、水はけが悪かったことから相当量の客土が入れられて整地が行われている。調査時においてもこの地区は掘削中の湧水が多く、トレンチが崩落しやすい状況であった。また、厚い客土によりトレンチも深くなることから、危険なため壁面や底面の清掃は行わず、下層部の土層の観察は掘り上げた廃土により行った。土層堆積の特徴としては、第II b層や第II f層が厚く堆積している部分が多いことが挙げられる。湿地性堆積の痕跡を示す第II g層はTP 24だけでしか確認されなかつたが、これが見られないところでも含水量が多く、比較的水位が高いことがわかる。遺構は検出されず、TP 26で古墳時代のものと見られる土器片1点が出土した。

市道の東側は、曾地丘陵から延びる支尾根の裾付近で、西側に比べて1m～2m程度地表面が高い。客土がなされていないため、第IV層頂部の標高差はそれ以上となる。TP 33・TP 34・TP 39・TP 40等は他の地点より第IV層が低めである。東側に延びてくる尾根の一部が周辺よりやや標高が高かったようである。このことは、遺構や遺物の検出状況にも影響を与えていた。遺物はTP 36～38・TP 43で出土し、遺構はTP 36・TP 38で検出した。東の尾根の先端に近いTP 44では表土直下に第IV層が検出されており、周囲より高い部分を削平されたものとみられ、遺物包含層や遺構が消失したものと考えられる。遺物はほとんど第III層から出土した。TP 36では、口縁部が外反する黒色土器の杯や、小片だが外面にハケメを施す土師器片がある。黒色土器以外は焼成がやや軟質で、摩滅が著しいものが多い。TP 37は量が少ないが、外面にヘラケズリをする土器片、円形の板状部材の一部が出土した。TP 38では、黒色土器の口縁部が2点、土師器壺の口縁部2点と体部破片がある。黒色土器はTP 36のものと同様に口縁部が外反する。壺の口縁部は極小片であるが、端部を丸く仕上げ、緩く外反するものである。TP 39・44からは、ともに摩滅が著しい土師器の小片が各1点出土した。黒色土器杯や土師器壺の形態、胎土の様相から、古墳時代後期に属するものとみられる。

TP 36では2基のピットが検出された。いずれも直径0.4m前後の円形、上面に暗灰色粘土が見える。TP 38では、竪穴住居の可能性があるやや大型の落ち込みがある。壁面の立ち上がりが緩やかで、底面の一部に梢円形に炭化物が集中する部分がある。トレンチ内では掘り込みがごく一部に確認されただけで、全体像は不明だが、確認できる範囲から想定すると大型の円形を呈する掘り込みとみられる。掘り込みが緩やかで、掘削中に包含層と覆土の区別ができず、当トレンチの出土遺物から遺構覆土のものを抽出することはできなかった。

以上の結果から、当調査区東側に延びてくる低位丘陵を中心に古墳時代後期の集落が存在したことが想定される。

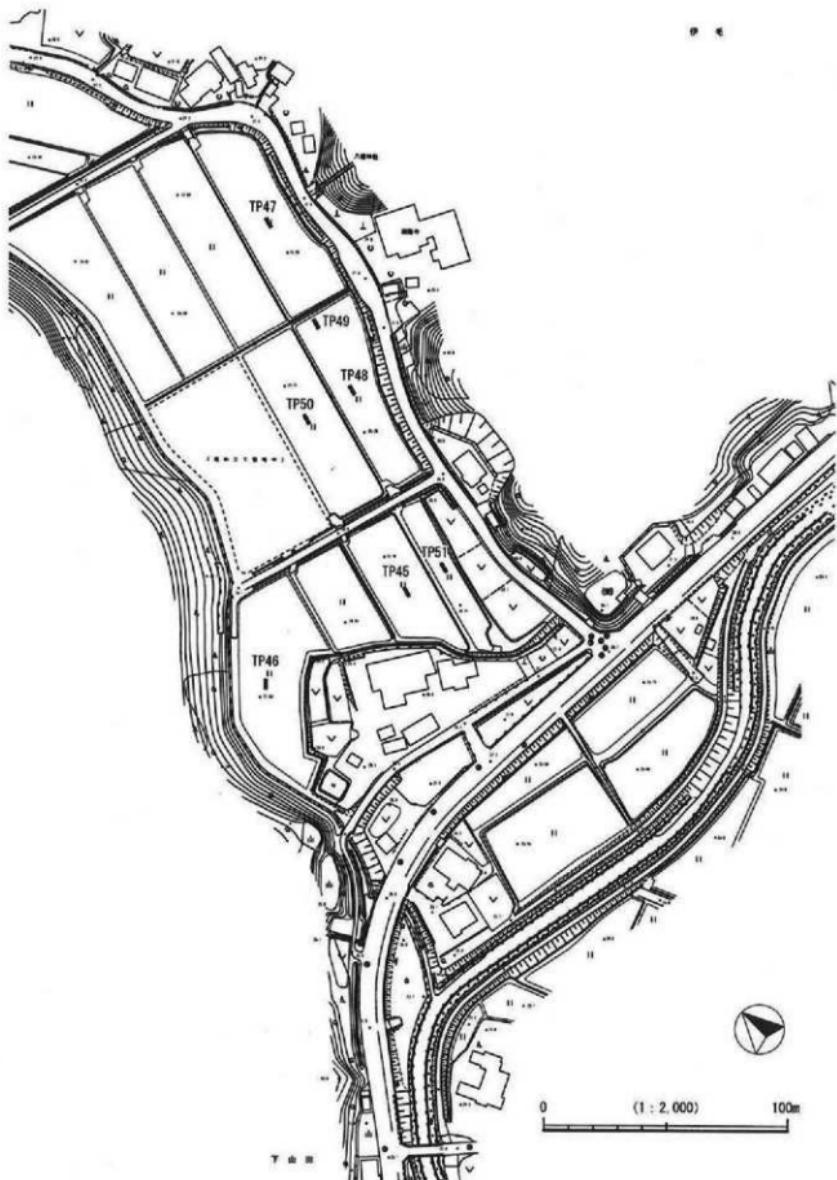
5) 伊毛地区

伊毛地区ではTP 45からTP 51の7ヶ所で調査を行った。西山丘陵から東へ延びてくる2筋の尾根に挟まれた谷底平野といった地形で、南側丘陵の裾に小河川が東へ向かって流れている。樹枝状に入り組む尾根の影響を受け、谷底では地形の起伏が大きかったもので、多量の客土が搬入されて地形は大きく改変されている。特に客土が多いところでは場整備による影響を受けないと判断し、トレンチは設定しなかつた。

土層の堆積状況は、調査対象地の南北で大きく異なっている。北側尾根付近では第II b層の下位に第III

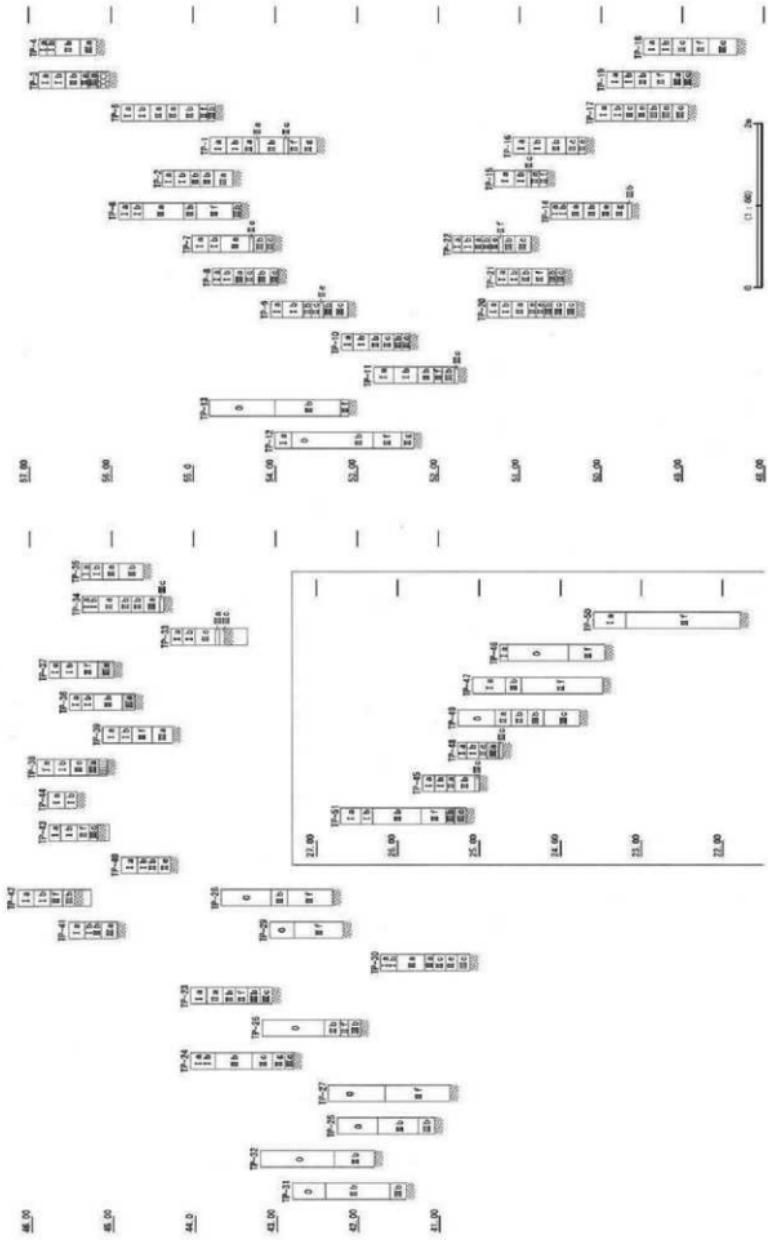


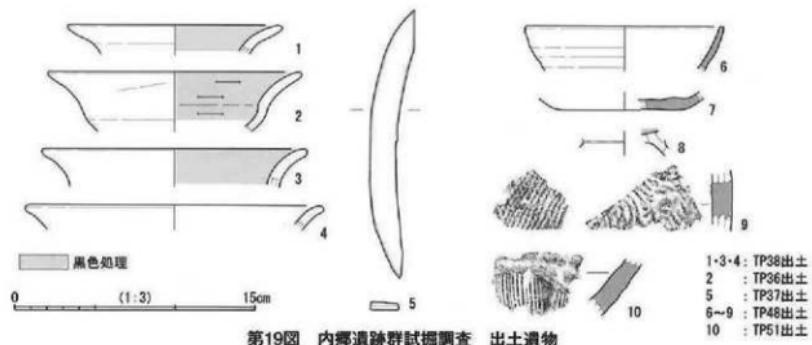
第16図 内郷遺跡群試掘調査 別山地区トレンチ配置図



第17図 内郷遺跡群試掘調査 伊毛地区トレンチ配置図

第18図 内部透跡群試験調査 土層柱状模式図





第19図 内郷遺跡群試掘調査 出土遺物

層が確認できるが、その下位で第Ⅳ層が検出されたが、南側では厚い第Ⅱf層の下に第Ⅱg層か第Ⅳ層が検出され、第Ⅲ層は確認されなかった。第Ⅳ層上面の標高も、北側尾根裾から離れるに従って低くなっている。旧来は、この谷底平野の大部分は湿地かそれに近い状態で、北側尾根の裾付近に狭い平坦地が広がっていたと見ることができる。

遺物は北側尾根に近いTP48～TP51で出土しており、特にTP48でまとめて出土している。TP48の出土遺物には地表下0.35mと浅いところで検出された遺物包含層から、須恵器・土師器・黒色土器・製鉄関連遺物が出土した。須恵器は無台杯・壺・瓶類があり、いずれも小片である。無台杯には小泊窯跡群産と見られるものもある。土師器は、無台碗・壺もしくは鍋が確認できる。須恵器に比べて量は多いが、小片で摩滅が著しいものが多い。黒色土器は1点で、高台をもつ壺か皿である。いずれも平安時代に属するものである。製鉄関連遺物には羽口と鉄滓がある。羽口は溶着滓が大半を占める先端部の小片で、本体はわずかである。全形を窺い知ることは困難だが、溶着部分の外径で6cm程度、中央の穴の直径は2cm以下の小型のものが想定でき、鍛冶炉に伴うものと考えられる。鉄滓は小型のものが2点で、いずれも磁石とメタルチャッカーに反応を示すことから、鐵塊を含むものである。含鉄の鍛冶滓とみられる。TP48では直径0.2m前後のビット3基が検出された。ここで、遺物・遺構が確認されたため、これらの分布範囲を絞り込むためにTP49を設定した。ここでも遺物は少ないながらも出土したが、遺構は検出されなかった。TP48に比べて第Ⅲ層以下が深く、第Ⅳ層上面では1m近くの差がある。遺物は須恵器壺の体部破片1点と土師器11点がある。土師器は摩滅が著しいが、無台碗の底部3点が確認できる。また、上層では近世の陶磁器が2点出土した。TP50は、遺構・遺物の分布範囲の何軒を絞り込むために設定したが、1m近い客土の下で第Ⅱf層、その下位で第Ⅳ層が検出された。第Ⅱ層中から流れ込んだものと見られる摩滅の著しい土師器片1点が出土した。遺跡は北側尾根縁辺に展開していることが想定されたため、東側の広がりを確認するため、遺物・遺構とともに検出されなかったTP45の近くではあるが、その北側にTP51を設定した。第Ⅱ層の堆積が厚かったが、その下位で第Ⅲ層が検出され、土師器20点ほどと珠洲片口鉢が出土した。土師器はこれも摩滅が著しいが、その中に無台碗の底部や叩き目をもつ壺の体部片が確認できる。珠洲片口鉢は、口縁端部を欠く小片であるがIV期頃のものと思われる〔吉岡1994〕。また、第Ⅱ層中からも珠洲片口鉢や近世陶器などが出土した。ここでも遺構は検出できなかった。

これらの結果から、当調査区では北側に延びている尾根の縁辺に平安時代の集落が存在していたとみることができる。

トレンチ番号	青灰色層深度(m)	包含層深度(m)	包含層厚(m)	遺構	遺物(点数)	備考
TP1	1.30					湿地堆積
TP2	0.85					
TP3	1.05	0.85	0.20	排溝場	炉壁片・流動滓・炭14kg、肥前焼(1)	甲戸遺跡(製鉄関連) 上層から肥前焼皿出土
TP4	0.70					
TP5	1.15				木製品(1)	遺物は流れ込みか
TP6	1.50					
TP7	1.00					
TP8	0.80					
TP9	0.95					
TP10	0.85					
TP11	1.05					
TP12	1.70					客土湿地堆積
TP13	1.70					
TP14	1.00					湿地堆積
TP15	0.65					
TP16	0.90					
TP17	1.15					
TP18	1.15					
TP19	1.05					
TP20	1.10					
TP21	1.00					
TP22	0.95					
TP23	1.00					
TP24	1.10					湿地堆積
TP25	1.25					
TP26	1.20				土師器(1)	
TP27	1.50					
TP28	1.35					
TP29	0.90					
TP30	1.10					
TP31	1.40					
TP32	1.40					
TP33	0.95					
TP34	1.00					
TP35	0.75					
TP36	0.80	0.60	0.20	ピット2基	土師器(19)、黒色土器(1)、炭(1)	清水尻遺跡
TP37	0.80	0.60	0.20		土師器(1)、木製品(2)	清水尻遺跡
TP38	0.85	0.60	0.10	堅穴・炭溜	土師器(17)、黒色土器(2)	清水尻遺跡
TP39	0.85				土師器(1)	
TP40	0.60					
TP41	0.60					
TP42	0.90					
TP43	0.75				土師器(1)	
TP44	0.35					
TP45	0.70					
TP46	1.80					
TP47	1.60				木製品(板1)	
TP48	0.55	0.35	0.20	ピット3基	須恵器(11)、土師器(104)、黒色土器(2)、鍛冶滓(3)、炭(2)	伊毛大新田遺跡
TP49	1.50				須恵器(1)、土師器(12)、肥前焼(1)	伊毛大新田遺跡
TP50	1.30				土師器(1)	
TP51	1.55	1.30	0.25		土師器(26)、硯溜(2)、染付(1)、木製品(2)	伊毛大新田遺跡

第3表 内郷遺跡群試掘調査 トレンチ別成果一覧表

4まとめ

今回は対象地を大きく3地区に分けて調査を行い、結果としてそれぞれの地区で各1ヶ所の新たな埋蔵文化財包蔵地が発見された。

甲戸地区ではTP3を中心とした地域を甲戸遺跡とした。検出された遺構は製鉄に伴うとみられる排滓場の一部と想定され、遺跡の本体は北側の丘陵斜面にあると想定される。出土遺物から年代などを特定することは難しいが、出土した炉壁片や流动渕の様相は前述したように内越遺跡で出土したものに近いと思われる。内越遺跡では、13世紀代に主に使用されたと見られる管状瓦窓が付く羽口が出土している〔新潟県教委1983〕。この他にも、西山町地城では11世紀から13世紀代に断続的に製鉄を行っていた宝童寺遺跡群がある〔柏崎市教委2008〕。また、地域のあちこちで製鉄関連遺物が採集されることから、中世において製鉄が集中的に行われた地域であったことが想定される。甲戸遺跡もそれら製鉄遺跡群のひとつであったと考えられる。製鉄炉本体や製鉄関連遺跡に付随する木炭窯も検出できていないため、遺跡の全貌を把握するには至っていないが、この地域の中世における鉄生産の様相を明らかにするうえで重要な発見となるであろう。

別山地域ではTP38を中心とする範囲を、古墳時代後期の集落跡である清水尻遺跡とした。西山町地城では古墳時代後期の遺跡が多く見つかっているが、それらは海岸部の高塙B遺跡を除くといずれも別山川中流域のものであった。今回、別山川上流域でこの時期の遺跡が見つかり、当期の遺跡の空白地の一部が埋まることになる。このことは、別山川流域の農業生産力の高さを物語るとともに、この地域一帯で活発に開発が進められていたことを想定させる。近傍には弥生時代後期の内越遺跡があり〔新潟県教委1983〕、今後は地域的な空白だけではなく、時期的な空白も埋められていくことが期待される。

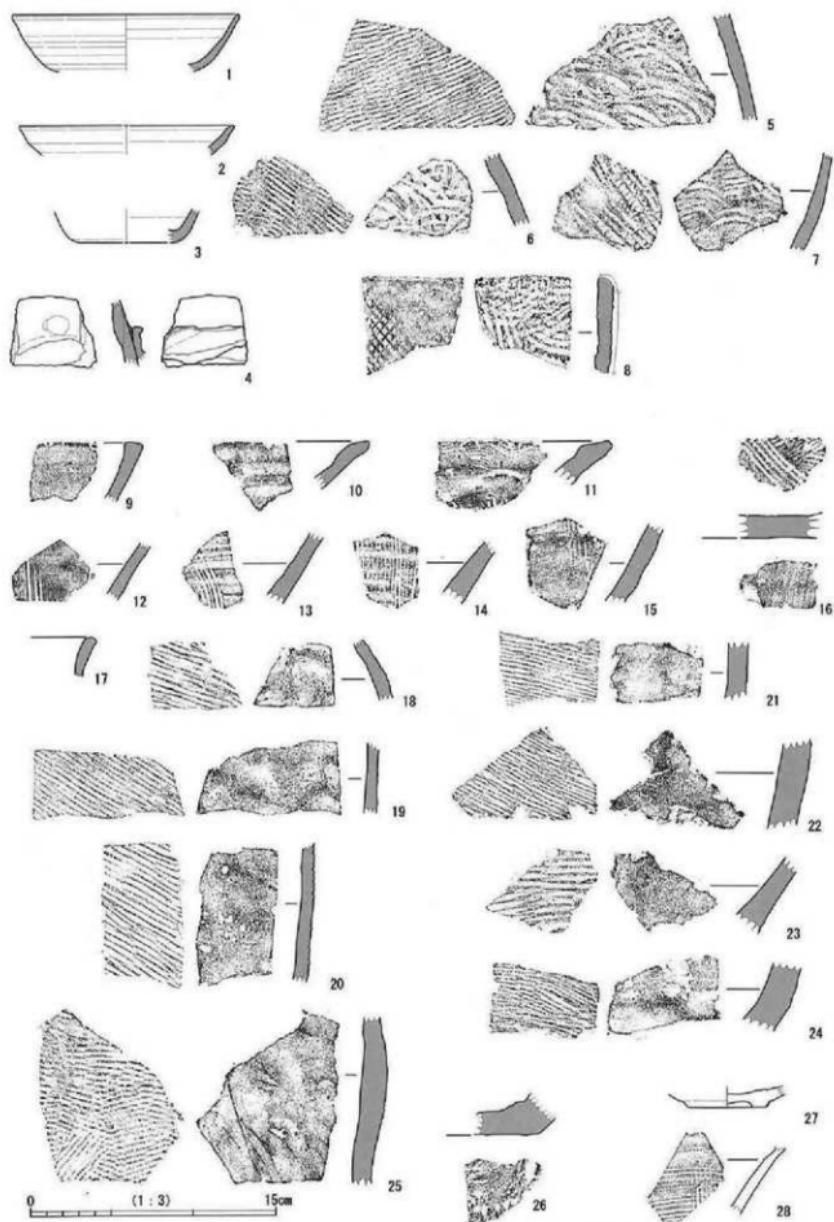
伊毛地区ではTP48を中心とする北側尾根沿いの範囲を伊毛大新田遺跡とした。これまで、古墳時代以前の遺跡が稀薄であった別山川右岸で新たに遺跡が見つかったことになる。遺跡の立地は、西山丘陵に入り組む狭小な谷底平野の入り口にあたり、周辺は湿地帯に近い状態であった可能性がある。農業生産に向いていた地形とは考えにくい。遺構が稀薄で、どのような性格の遺跡であったかは明らかにではないが、製鉄関連遺物も出土しており、今後の調査の発展が期待される。

古代北陸道の通過地とも言われる別山川流域であり、未だ遺跡の空白地であっても道の遺跡が埋まっていることも十分想定できる。これまでに把握された遺跡を保護するとともに、未知の遺跡に対しても適切な保護が行われるように調査を継続していくことが重要である。なお、事業主体者の協力により、調査結果がほ場整備の詳細設計に活かされ、今回発見された3遺跡の全域が現状保存された。

附 周辺区域採集遺物

別山地域で発見された清水尻遺跡の南西約250mの位置に、尾頭部地区（西山町別山）がある。かつて市内の考古資料を多く採集された宇佐美萬美氏が、同地区でも発見したとみられる遺物片があるので、試掘調査の参考までに、附録として紹介しておきたい。

遺物の概要 遺物は、土器・陶磁器などの破片で、合計50点を数える。一部には黒色ペンによる注記がみられる。小破片のため不明瞭なものもあるが、種別としては、土師器1点、須恵器15点、珠洲焼24点、



第20図 内郷遺跡群周辺区域（西山町尾頃部地区）のおもな採集遺物

信楽焼3点、肥前焼4点（陶器2点、磁器2点）、その他3点に分類できる。このうち28点を第20図に図化することができた。

1~8は、須恵器である。4は小片であるが、閉塞円板の接合部分が認められたため、横瓶とした。さらに、外面には長さ2cmほどの口頸部片が溶着している。これは、窯跡に伴う遺物である可能性、あるいは焼成の際に別個体の破片を焼台に転用した可能性などが考えられる。胎土からは、佐渡小泊窯の製品が主体的である。時期は、1の器形などから、V2~VI1期（9世紀中葉）と考えられよう【春日1999・2001】。9~26は、珠洲焼である。擂鉢（9~16）をみると、9は第IV期、10・11は第V期と考えられるので、全体としては14世紀~15世紀前半と推測さ

れる【吉岡1994】。信楽焼は胴部片のみであるため、図化は省略した。珠洲焼の第V期段階に伴うものであろうか。27・28は、肥前焼の陶器である。27は皿で、見込みに砂目痕があることから、II期（1610~1650年代）の製品と考えられる【盛2000】。図化できなかった磁器には18世紀段階の製品も含まれている。

今後の課題 これらの遺物のうち、須恵器の一部（7点）が宇佐美氏の著「柏崎刈羽の古代遺跡について 弥生土師須恵」【宇佐美1979】に「西山町尾頭部遺跡の須恵器」として写真が掲載されている（23頁）。写真の須恵器を第20図と照合させれば、左上2点は小片のために図化を省略したが、右上が5、右下が8、中上が7、中央が4、左下が6となる。さらに、同文献には「昨年（五十三年）圃場整備で尾頭部の須恵窯址を含めた遺跡を発見。」とある。発見した時期は遺物の注記とも離隔はないため、同氏が発見した須恵器窯に伴う遺物と考えられる。おそらく、須恵器4なども窯跡とするの根拠となったのではないだろうか。その地点は明らかではないが、当時は場整備が行われたのは、高内山（高内城跡）から派生する丘陵の北側で西流する沢地形の部分である。周囲の斜面を利用して須恵器窯が営まれた可能性はあるが、須恵器には佐渡小泊窯の製品が多いことに注意が必要である。また、中世の遺物は、尾頭部の館跡や高内城跡との関連が考えられる。

番号	種別	器種	色調	参考
1	須恵器	輪台杯	灰（5Y 5/1）	
2	須恵器	輪台杯	灰（5Y 5/1）	
3	須恵器	輪台杯	灰（5Y 6/1）	
4	須恵器	横瓶	黄灰（2.5Y 6/1） （自然釉灰付リーブ）（5Y 6/2）	白堀御村着 注記「西山尾頭部/S53.8.30」
5	須恵器	瓶	黄灰（2.5Y 6/1）	注記「尾頭部」
6	須恵器	瓶	灰白（10YR 7/1）	注記「尾頭部」
7	須恵器	瓶	黄灰（2.5Y 6/1）	注記「尾頭部」
8	須恵器	瓶	灰（5Y 6/1）	礫石に転用 注記「尾頭部」
9	珠洲 珠洲	片口鉢	黄灰（10YR 5/1）	
10	珠洲 珠洲	片口鉢	灰白（N 7）	
11	珠洲 珠洲	片口鉢	灰（N 5）	
12	珠洲 珠洲	片口鉢	黄灰（10YR 4/1）	
13	珠洲 珠洲	片口鉢	黄灰（2.5Y 4/1）	
14	珠洲 珠洲	片口鉢	灰（2.5Y 6/1）	後記「尾頭部」
15	珠洲 珠洲	片口鉢	灰（10Y 6/1）	
16	珠洲 珠洲	片口鉢	灰（N 6）	
17	珠洲 珠洲	盤	灰（5Y 5/1）	注記「尾頭部」
18	珠洲 珠洲	甕・壺	黄灰（2.5Y 5/1）	
19	珠洲 珠洲	甕・壺	灰（N 6）	
20	珠洲 珠洲	甕・壺	灰（5Y 6/1）	
21	珠洲 珠洲	甕・壺	灰（5Y 6/1）	注記「西山尾頭部/S53.8.30」
22	珠洲 珠洲	甕・壺	灰（5Y 6/1） 黄灰（2.5Y 4/1）	津村着
23	珠洲 珠洲	甕・壺	灰（N 6）	津村着
24	珠洲 珠洲	甕・壺	黄灰（2.5Y 6/1）	
25	珠洲 珠洲	甕・壺	灰（5Y 5/1）	
26	珠洲 珠洲	甕	黄灰（2.5Y 5/1）	
27	肥前 肥前	皿	（原）にぶら・輪板（10YR 7/3） （輪板黄斑）（2.5Y 5/3）	注記「尾頭部」
28	肥前 肥前	擂鉢	（原）里板（5YR 6/3） （輪板里斑）（10YR 2/2）	

第4表 内郷遺跡群周辺区域（西山町尾頭部地区）の
おもな採集遺物一覧表



※原図は「西山町地図2」1:5000（西山町1996年）による。
※は場整備範囲は新潟県地域振興局からの情報提供による。
第21図 昭和53年度西山町尾頭部地区のは場整備範囲と周辺の遺跡

VI 長嶺前田遺跡（第1次）

- 一般県道向山西山停車場線道路改良（長嶺バイパス）工事に係る試掘・確認調査 -

1 調査に至る経緯

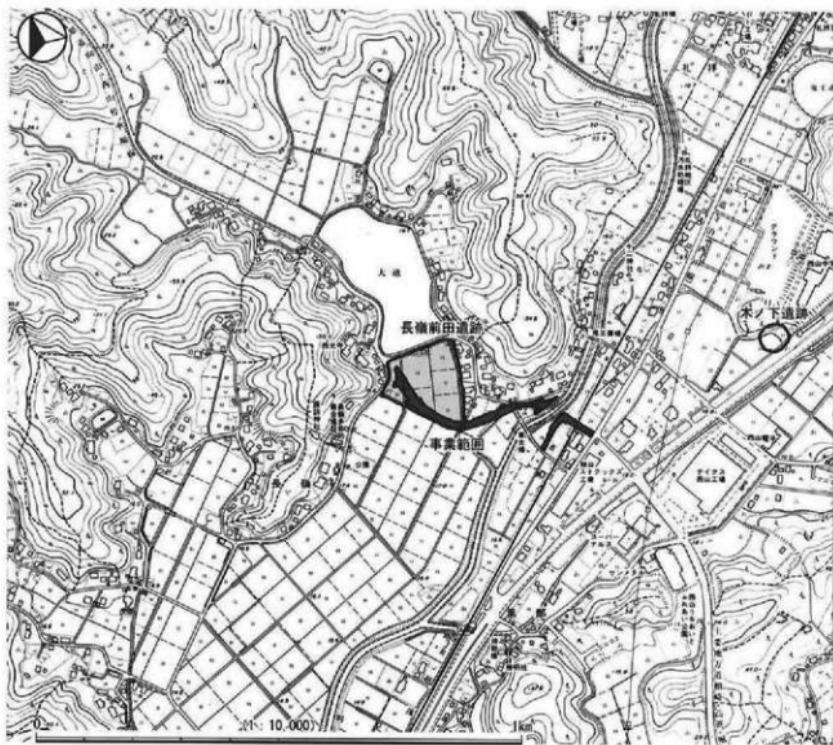
柏崎市西山町長嶺は西山町地域の南端部の別山川右岸に位置する。地区的西側には、標高100m前後の西山丘陵がほぼ南北に走り、その西側に日本海が広がる。地区の大部分は水田地帯で、西山丘陵の裾を中心には住宅が建ち並ぶ。西山丘陵に樹枝状に入り組む谷地の入り口を塞ぐように、農業用水を確保するためのため池の大池がある。ここには、冬期に多くの白鳥が飛来し、訪れる人を楽しませている。

当調査の契機となった一般県道向山西山停車場線改良工事（長嶺バイパス）は、この県道と主要地方道柏崎・高浜・堀之内線をバイパスにより接続するものである。これにより、北陸自動車道西山I.C.から海岸部の国道まで容易に達することができ、観光の促進にも促されることが期待されるものである。バイパス法線は、主要地方道と国道116号線の交差点から大池南岸の県道までを、長嶺地内の水田地帯をぬける大きくS字を描くように接続するものである。当事業の採択は平成22年度のことであったが、柏崎市教育委員会ではそれ以前にこの計画の存在を把握していた。事業対象地には、それまで周知の埋蔵文化財包蔵地は存在しなかったが、平成19年4月に現地確認のための分布調査を実施した。この際、大池の南側の畑地で主に古代の遺物が採集された。また、その他の範囲でも、少ないながらも古代から中世の遺物が採集された。このため、新発見の長嶺前田遺跡として周知化を行い、事業主体者に対しても事業実施に先だって協議が必要であることを連絡していた。

その後も逐次事業主体者と情報交換などを行っていた。平成21年度に事業が採択され、埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った。事業スケジュールは、平成22年度に詳細設計、丈量測量を行い、平成23年度に用地取得、平成24年度から工事に着手することであった。長嶺前田遺跡は遺物散布地として周知化はしていたが、地下の様相は明らかになっておらず、これ以外の範囲の状況も確認できていなかったため、事業予定地内で確認調査を実施することで了解を得た。

2 調査区と周辺の環境

事業対象地は柏崎市西山町の長嶺・黒部・鬼王地内にまたがる。今回は長嶺地区を中心に、一部鬼王地区でも調査を行った。長嶺地区と黒部川は別山川を地区的境界とし、右岸に長嶺地区、左岸に黒部地区が位置する。別山川は出雲崎町との境界付近から流れ出し、西山町地域、刈羽村を南へ向かって流れて鶴石川に合流する2級河川である。現在、当地区での流れは直線的なものとなっているが、これは昭和30年代に改修された後の姿である。それ以前は長嶺地区側に大きく蛇行しており、降雨期には排水不良による浸水被害が度々起きていたとのことである。別山川の西側には荒浜砂丘から続く西山丘陵が北へ向かって延び、海岸部と地形的に離れている。長嶺地区はこの西山丘陵の麓の沖積地を中心とする。住宅は広い水田地帯を囲むように丘陵裾に建ち並ぶ。西山丘陵からわき出る水をためる大池は、樹枝状に入り組む谷地



第22図 長嶺前田遺跡第1次確認調査 調査対象地と周辺の遺跡

の入り口を塞ぐようにしており、この地区的農業用水を供給するとともに、冬期に飛来してきた白鳥の休息地にもなっている。鬼王地区は西側が別山川に接し、東には曾地丘陵から大きく張り出した支尾根が迫っており、狭い沖積地に立地する。この長嶺・鬼王地区の沖積地ではこれまで長嶺前田遺跡以外の埋蔵文化財抱蔵地はほとんど確認されておらず、周辺の丘陵上で狐山塚群や鎌田城、滝谷城などが知られる程度である。

3 試掘調査

1) 調査の目的と方法

分布調査で遺物が集中して採集されたのは大池南側の畠地であるが、ここは客土が敷入されている可能性があった。しかし、道路法線内やその周辺の広い範囲でも少量とはいえ遺物が採集されていたので、法線の全域を調査対象としたが、用地取得以前の調査であり、翌年にも稲の作付けを行う予定であったため、

トレンチの設定は最小限にとどめることとし、地権者の了解を得た。原因となる事業が道路建設であるため、遺物包含層や遺構面の有無を確認することだけでなく、本発掘調査のための積算資料を得ることも目的である。そのため、包含層の堆積状況や遺構・遺物の密度などを把握することも大きな目的であった。しかし、翌年度に耕作を控えていることから、トレンチの規模はそれほど大きくできず、また、掘削深度もある程度限定する必要があり、遺構検出面以下への掘削は断念した。トレンチを設定する位置はあらかじめ図面上で計画し、地権者の了解を得た。水田では一区画に対して1ヶ所から2ヶ所の調査を予定し、耕耘機の進入などに支障がない部分を選定した。

調査は法面バケットを装着したバックホーで掘り下げを行い、土層の堆積状況を確認し、遺物包含層や遺構面の把握を行って記録を作成した。

調査は平成22年11月16日から18日にかけて行った。調査対象面積は約3,300m²であり、8ヶ所のトレンチの合計約34.5m²で調査を行った。これは調査対象区域の約1.0%にあたる。

2) 調査の概略

今回の調査では長嶺地区に7ヶ所、黒部地区で1ヶ所にトレンチを設定した。TP1は大池から90mの距離の水田内、ここから南へ向かって法線の中心付近にTP5までを設定した。その南の方に区画された畑は作付けが行われているため調査を行っていない。西側の旧宅地部分ではTP6・TP7の2ヶ所のトレンチを設定した。その西側は畠地や住宅地であるため、今回は調査しなかった。別山川左岸の黒部地区では、JR越後線西側の赤線上にTP8を設定した。JRの南側は新設する道路部分が狭小なため、遺跡の存在については、これで概ね判断できる見込みであった。

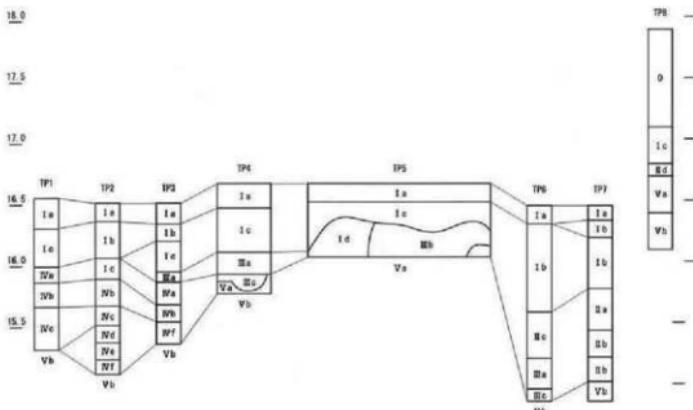
基本土層は客土を含めて6層に大別して把握した。第0層は客土である。第I層は表土・耕作土・水田床土などの現在の地表に関係する層位である。長嶺地区では昭和30年代には場整備が行われており、この際に整地されたものである。第II層は自然堆積層であるが、これも地区によっては場整備による掘削を受けている部分がある。土質はいずれも粘質の強いシルト層で、色調により細分した。第II d層は黒褐色を呈する。遺物は包含せず、しまりが非常に弱いものである。第III層は遺物包含層である。色調により2種に細分した。第III a層は褐灰色シルト層、第III b層はにぶい黄橙色を呈するシルト層で炭化物が含まれる。第IV層は湿地性堆積に間わるとみられる層で、比較的しまりが弱いシルト層を主体とする。水分を多く含んでいる。色調や土質により6種に細分した。この中で、第IV c層は腐植物を多く含むもので、湿地性堆積の痕跡として特有のものである。第V層は遺構確認面となる地山層である。色調は灰白色と青灰色のものがある。

TP1は、現地踏査で最も多くの遺物が採集された畑に近いため、遺跡の存在する可能性が高いとみていた。しかし、地表面下約0.9mで腐植物が主体の第IV c層が検出された。当地域ではこの腐植物層の下位で遺跡が見つかることはほとんどないが、念のため基底部まで掘り下げるとした。第IV c層の堆積は0.4m程度で、その下で青灰色シルトの第V b層が検出されたが、遺構は見られなかった。掘削深度は地表から約1.25mである。遺物は摩滅が著しい土器の極小片2点が第IV a層から出土しただけであった。TP2でもほぼ同様の深度で第IV c層が検出された。さらに第IV d～e層が検出された下で第V層を検出した。ここでも遺構は確認できなかった。また、遺物も出土していない。

TP3では第I層の下で遺物包含層に相当する第III層を検出した。第III層中から珠渦型の体部破片が出土したが、堆積の厚さは10cm程度と薄く、上位の自然堆積層も検出されなかつたため、は場整備により上

第23図 長崎前田遺跡第1次確認調査 トレンチ配置図





第24図 長瀬前田遺跡第1次確認調査 土層模式図

部は削平されたものと見られる。この下位で第IV層が検出されたが、腐植物は混入していない。第V層がTP2に比べて高い位置で検出されたことから、湿地帯の縁辺が近づいていると想定された。

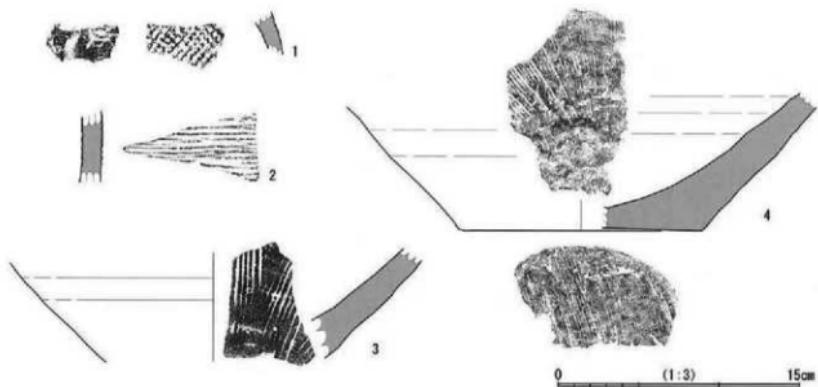
TP4でも第II層は検出されず、第I層の下で第III層が検出された。第III層に炭化物がやや多く含まれており、遺物は土師器・須恵器・珠洲が各1点出土した。厚さ0.2m程の第III層を除去したところで第Va層が確認され、溝1基とピット2基を検出した。第V層の上面はTP3に比べて0.6m程高くなっている。遺構の断面を把握するため、トレンチの壁面を掘り下げたところ、第Vb層の下に第Va層を確認した。

TP5では、第I層の下位で、第Va層に似る第IIIb層を検出した。地山面のような色調であるが、細かい土器片と炭化物が散布しているため遺構検出面とは思えず、さらに掘り下げを継続したところ、TP4の第Va層と同様の面を検出することができた。壁面の観察からは、土器を含む層が盛り土状にもみられたが、トレンチが狭いため確定するには至らなかった。また、トレンチを横断するように場所整備前の水路跡も検出された。なお、第I層からは近世陶器1点が出土した。

TP6・TP7の地点は、河川改修前の別山川の川岸に位置する旧宅地跡である。旧河道により擾乱を受けていることも想定されたが、念のため調査を行った。TP6では地表下1.2mで第III層が検出され、珠洲片口鉢の底部破片が出土した。その下位で第Vb層が検出されたが、遺構は確認できなかった。TP7では第III層は確認されず、第II層の下位で第Vb層が検出された。ここの第II層中には腐植しきっていない草のような植物が多く含まれていた。

黒部地区で設定したTP8では、現代の客土が厚く堆積している。この下位に第I層と第II層があり、その下から第Va層に色調が類似するシルト層が検出された。しかし、長瀬地区の第Va層と異なり、しまりが極端に悪く、水分を多く含むものであった。また、TP7の第II層と同様の植物遺体が多く含まれていた。第Vb層を検出するまで掘り下げを行ったが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

出土遺物は摩滅が著しいものや細片が多く、図化し得たものは4点に過ぎない。TP1で出土した土器片2点は、1cm四方にも満たない小片で、時期や器形は判断できない。TP3から出土した珠洲窯(2)は体部破片で、焼成はやや軟質である。TP4では須恵器窯体部(1)、珠洲片口鉢体部(3)、土器小片などが出



第25図 長嶺前田遺跡第1次確認調査 出土遺物

土した。須恵器は外面に格子叩き目が付く。珠洲は内面に間隔の広い拂り目が施される。土器片は小片で判別が困難であるが、古代のものと想定する。TP5では土器小片が7点出土している、いずれも摩滅が著しく、調整痕などは確認できない。胎土に砂粒を多く含んでおり、古墳時代のものと想定したが、断定はできない。TP6で出土した珠洲片口(4)は比較的大きな底部付近の破片である。器壁は厚く、焼成は良好で堅緻である。内面には見込みを除いて全面に拂り目が施される。外面のロクロナデは粗雑な印象を受ける。VI期頃のものと想定する〔吉岡1994〕。

4 まとめ

調査の結果、黒部地区では遺構・遺物は確認されず、この部分では工事を実施することに支障はないものと判断した。しかし、JR越後線と別山川に挟まれた範囲に古屋敷の小字名が残っており、この部分に畠地として利用されているところもあるため、改めて調査を行う必要があると判断した。

長嶺地区では当初の大池掘に遺跡の中心があると想定していたが、結果としては調査対象地南側の別山川寄りで遺構・遺物が確認された。出土した遺物はそれほど多くなく、大半は小片で摩滅したものである。時期の比定が困難であるが、古墳時代から中世までの複合遺跡であることが想定される。調査区の北側には西山丘陵から延びる尾根が迫っており、丘陵裾から別山川付近にこれらの時代の集落が存在したことが考えられる。

別山川流域では左岸側の吉井遺跡群や坂田遺跡群などの大規模な遺跡群を始め、多くの遺跡が見つかっており、古くから活発に土地利用がされてきたことが明らかになりつつある。対照的に、右岸側では把握されている遺跡が少なく様相は不明瞭であったが、今後は別山川流域の歴史を一層明らかなものとすることが可能となってくるであろう。

なお、長嶺前田遺跡では平成23年度から記録保存のための発掘調査に着手した。調査では、古墳時代後期を主体とする資料が出土している。

VII 剣下川原遺跡 隣接地

- 一般農道整備事業（矢田2期地区）に係る試掘調査 -

1 調査に至る経緯

柏崎市鶴地区は、市街地から北東へ約4.5kmの位置にある平野部である。地形的には、鶴石川中流域右岸にあり、東側では同地区的北側で別山川（鶴石川支流）に合流する土合川が流れている。現在の集落は鶴石川の自然堤防上に展開しているが、その一部に剣下川原遺跡が周知化されている。その隣接地にあたる土合川左岸で一般農道整備事業（矢田2期地区）が計画されたので、埋蔵文化財に関する調査を実施することとなった。

調査原因事業の概要 今回の試掘調査の原因となった一般農道整備事業（矢田2期地区）は、新潟県柏崎地域振興局（担当：農業振興部 農村整備課）を事業主体とする。事業は、農道の新設・改良工事（延長1,070m）で、幅7mの道路が造成される。

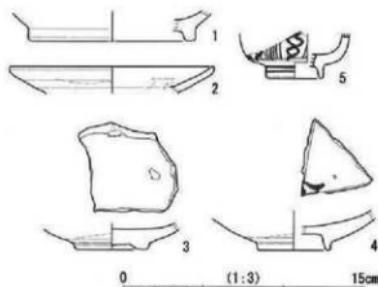
施工区域は、工法・工期によってA～D地区に分割される。A地区は、すでに舗装道路があり、工事で掘削されるのは、両側のそれぞれ幅1m前後の範囲である。B～D地区は、サーチャージ工法（盛土沈下による土壤改良）を実施した後に道路へ施工されるので、現地表面以下に掘削を受けるのは、側溝などに限られる。B地区は新設区域で、現況は水田である。C・D地区は、現況が幅3m前後の砂利舗装で、道路の両側がそれぞれ2mほど拡幅される。

試掘調査に至る経緯 柏崎市教育委員会（以下、「市教委」と略）が原因事業を把握したのは、平成22年10月20日付け教文第870号で県教育庁文化行政課長から通知された平成23年度国・県関係機関等土木工事等状況調査による。当方では同年12月21日付け教総第575号の2で、事前に協議が必要である旨を事業主体者へ通知した。

平成23年1月5日、事業主体者から事業の内容について説明を受け、その後すぐに現地踏査を実施した。その結果、B～D地区から遺物の破片が採集された。ほとんどが近世陶磁器であったが、C・D地区の一部から古代土器の細片が若干採集された（第2節第1項）。これにより、剣下川原遺跡範囲の延長もしくは未発見遺跡が存在する可能性が生じた。

現地踏査の結果、所見をもとに次のような取扱いとした。まず、A・B地区は、中世以前の遺跡が所在する可能性は低いため、事前の調査等は不要とするが、今後の状況に変化があれば対応していく。C・D地区は、農閑期に試掘調査を実施し、その調査結果から本発掘調査の要否等を判断する。試掘調査の具体的なスケジュールとして、当初は平成23年度秋（稲刈後）となっていたが、C地区については早目の要否判断が望まれたため、第1次調査として22年度末に行うこととなった。

事業主体者からは、平成23年1月5日付け埋蔵文化財の調査について依頼がなされた。市教委では、同年3月8日付け教総第616号で試掘調査の着手を新潟県教育委員会（以下、「県教委」と略）教育長へ報告した。予定どおり開始され、同日中に終了した。調査の結果や取扱いについては、同年3月18日付け教総第616号の2で県教委教育長へ報告した。



第26図 刈下川原遺跡隣接地探集遺物

2 調査の概要

1) 遺物の散布状況

前述のとおり、調査に先立って現地踏査を実施した際、C・D地区とその南側の水田から遺物の散布が認められた。探集された遺物は41点で、古代の土器（土師器・須恵器）7点、近世（以降）の陶磁器34点である。このうち、図化が可能であったのは5点のみであった。

散布状況 敷布する範囲を南側の水田区画をもとに14分割し、西から①・②…⑬地点と仮称すると、①～⑨地点がD地区、⑩～⑯地点がC地区となる。遺物の散布状況（第5表）をみると、古代・近世の遺物とも刈下川原遺跡に近いD地区西部にやや多く散布しており、小片ながら⑦・⑯地点にも古代の土器が点在しているため、距離を隔てたC地区側までもが遺跡の範囲となる可能性が生じた。

古代の土器 土師器5点、須恵器2点である。土師器は、1以外は小片で、器種も不明である（図版25 e・f - ウーカ）。1は土師器有台碗とみられるが、焼成は良好で、浅黄褐色を呈する。10世紀頃の所産であろうか。ただし、肥前陶器の無釉部分の可能性もあり、注意を要する。須恵器は、杯類（無台杯カ）の破片である（図版25 e・f - ア・イ）。佐渡の小泊窯産とみられる。9世紀頃の製品と思われる。

近世（以降）の陶磁器 近世の陶磁器は肥前産が多く、陶器皿や磁器碗の破片があるⁱⁱⁱ。2は肥前陶器の皿である。見込みに段を有する。I～II期（17世紀前半）の製品であろうか。3は肥前陶器の皿で、見込みに胎土目痕をのこす。I～II期（16世紀末～17世紀初）の製品である。4は肥前陶器の皿で、見込みに山水文を描いた京焼風陶器とみられる。III期（17世紀後半）の製品と考えられる。5は肥前磁器の小壺である。III期頃の所産であろうか。

2) 調査の目的と方法

今回の調査の目的は、施工区域内のC地区（No.83+17.0～No.92+15.3）における遺跡の有無について確認することである。C地区的延長は178.3mで、拡幅部分となる新規用地の幅は両側がそれぞれ2mであるため、178.3m×2m×2=713.2m²が調査の対象となる面積である。

調査の方法としては、新規用地に対して任意の試掘坑を発掘し、遺構・遺物などを確認していくこととした。発掘作業は、法バケットを装着した0.25m³の重機（バックホー）を使用する。試掘坑の名称は、調査順に算用数字を用い、地区名の「C」を冠して「TP-C1」などとした。

地点	土師器	須恵器	陶磁器 (25例)	合計	出航遺物
①②	1		6	7	2・5・e
③			7	7	
②③			2	2	
④		1	1	2	a
③④	1		6	7	1・3
⑤	2			2	e・f
⑥			1	1	
⑦	1			1	d
⑧			1	1	
⑨			2	2	
⑩⑪			1	1	
⑫			2	2	
⑬		1		1	b
⑭			5	5	4
	5	2	34	41	

※ 地点は第28図参照。
※ 出航遺物は、第26図・図版25参照。

第5表 刈下川原遺跡隣接地C・D地区
探集遺物集計表



3) 調査の経過と試掘坑の概要

試掘調査は、平成23年3月9日に実施した。一時曇天となったが、おおむね晴天であった。調査員は担当を含む2名で、調査は半日で終了した。試掘坑は3ヶ所で、面積は合計約68m²である。これは対象区域の約1.0%にあたる。

調査対象区域でも遺跡網である⑩地点に、西からTP-C1・TP-C2を設定した。TP-C1では、褐色灰色の耕作土層（第I層）を除去すると、暗灰色を呈する盛土層（第II b層）となった。さらに下へ発掘すると、地山粘土が混じる自然堆積の灰色粘土層（第III層）となり、深度38cmで地山粘土層（第IV層）となる。TP-C2でも同じ土層の堆積状況がみられ、深度40cmで地山土層（第IV層）上面が確認された。TP-C2では溝跡が検出されている。幅は約70cmで、おおむね南北方向に走っている。覆土は灰色粘土あるいは黒灰色粘土で、地山粘土ブロックが多く混じり、縮まりが弱い。木片が1点出土した。木片は板状で、長さ32.5cm×幅5.5cm×厚さ1.0cmである。溝跡は耕作土直下の盛土層（第II b層）上面から掘り込まれていることや覆土の状況から、近代以降の所産と考えられた。この他に遺構・遺物は確認されていない。

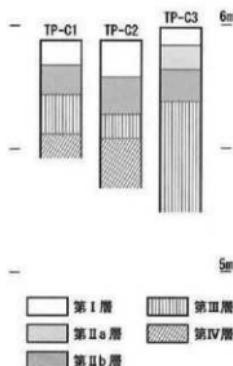
TP-C3は、⑪地点に設定した。耕作土層（第I層）下に暗青灰色粘土層（第II a層）がみられたが、その下はTP-C1・TP-C2と同様に第II b層・第III層となった。しかし、第III層には腐植土がやや多く含まれており、40cm以上も厚く堆積していた。TP-C3は深度0.8m近くになども地山粘土層（第IV層）は検出されなかった。

その後も東側へと進み、試掘坑を発掘する予定であったが、事業主体者と旧土地所有者との連絡状況の関係から、調査を中断することになった。

3 調査のまとめ

調査は中断となったが、剣下川原遺跡に近い西側から遺構・遺物が出土しなかったことから、C地区には同遺跡の範囲は及んでいないと考えられる。また、地山粘土層（第IV層）は土合川の流れる東側へ傾斜していく傾向がみられ、TP-C3では腐植土が混じる第III層が厚く堆積していたことから、遺跡が立地する環境にはなかったと推測できよう。したがって、調査対象区域（C地区）に遺跡が存在する可能性は低いと考えられる。南側周辺に散布していた遺物は盛土層（第II層）に伴う可能性が生じてきた。しかし、D地区については、散布する点数が多いことから、遺跡範囲が及んでいる可能性はまだ残されている。

註) 肥前陶磁器については、森 峰雄氏【森2000】・野上建紀氏【野上2000】の研究に基づいた。



第29図 剣下川原遺跡隣接地試掘調査
基本層序柱状模式図 (S=1:20)



第30図 剑下川原遺跡隣接地試掘調査
TP-C2検出遺構模式図

VII 総括

第21期となった平成23年度の柏崎市内遺跡発掘調査事業では、試掘調査・確認調査の現場業務のほかに、平成22年度に実施した6件の調査について整理業務を継続し、報告書として本書を作成した。

6件の内訳は、試掘調査5件、確認調査1件である。唯一の確認調査となった長嶺前田遺跡（第VI章）では、新たな資料が得られたことで、遺跡範囲などをより確実にすることができた。試掘調査では、女谷・市野新田遺跡群（第III章）で天皇峰遺跡・内郷遺跡群（第V章）で甲戸遺跡・清水尻遺跡・伊毛大新田遺跡を新たに発見することができた。坂田地区（第II章）・別保地区（第IV章）・剣下川原遺跡（第VII章）では、調査対象区域において遺跡の痕跡は得られなかったものの、堆積土層や遺物散布の状況など、各種の資料を得ることができた。以上の成果は、地域の歴史を理解するための足掛かりとなるものである。

なお、平成23年度には天皇峰遺跡・長嶺前田遺跡で本发掘調査、別保地区・長嶺前田遺跡で別地点を对象とした試掘調査・確認調査が行われており、更なる成果が期待される。その一方で、内郷遺跡群で発見された3遺跡は、軽微な工事立会が実施されたが、ほぼ全域が現状保存されることとなった。これは、試掘調査のデータが事業設計に反映されたことによるものである。

《引用・参考文献》

- 植木昭吾 1997 「越後の地名 その由来を探る 中越編」(私家版)
- 宇佐美篤美 1979 「柏崎刈羽の古代遺跡について 弥生土器須恵」「柏崎・刈羽」第7号 柏崎・刈羽
郷土史研究会
- 柏崎市教育委員会 2008 「宝童寺遺跡群」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第55集)
- 柏崎市教育委員会 2010 「柏崎市の遺跡XIX」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第62集)
- 柏崎市教育委員会 2011 「柏崎市の遺跡XX」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第65集)
- 春日真実 1999 「土器編と地域性」新潟県考古学会編「新潟県の考古学」高志書院
- 春日真実 2001 「和島・出雲崎地域における7世紀末から10世紀の土器の変遷」「一般国道116号出雲
崎バイパス関係発掘調査報告書IV 椎子谷窯跡」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第104
集) 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鳴海忠夫 1992 「刈羽郡西山町坂田の館跡 - 地籍図と遺物から把握した中世館跡の一例 - 」「長岡郷土
史」第29号 長岡郷土史研究会
- 新潟県教育委員会 1983 「国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書 内越遺跡」(新潟県埋蔵文化財調査
報告書第33)
- 野上建紀 2000 「磁器の編年(色鉛以外) 1. 袋・小壺・皿・紅皿・紅猪口」「九州陶磁の編年 - 九州
近世陶磁学会10周年記念 - 」九州近世陶磁学会
- 森 峰雄 2000 「陶器の編年 1. 袋・皿」「九州陶磁の編年 - 九州近世陶磁学会10周年記念 - 」九州
近世陶磁学会
- 山本隆志 2008 「高野山清淨心院「越後過去名簿」(写本)」「新潟県立歴史博物館研究紀要」第9号
新潟県立歴史博物館
- 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館

調査体制

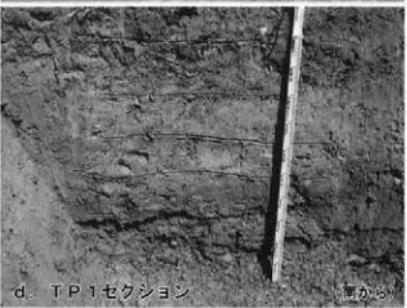
平成22年度 現場業務・整理業務

調査主体	柏崎市教育委員会 教育長 小林和徳	
(担当: 教育総務課 遺跡考古館)		
総括	赤川道夫(教育部長)	
	本間敏博(課長)	
監理	品田高志(埋蔵文化財係長・学芸員)	
庶務	田中裕美子(埋蔵文化財係非常勤職員)	
調査担当	中野純(埋蔵文化財係主査・学芸員)	~平成22年12月31日
	(埋蔵文化財係主任・学芸員)	平成23年1月1日~
	伊藤啓雄(埋蔵文化財係主査・学芸員)	
	中島義人(埋蔵文化財係主査・学芸員)	
調査員	阪田友子(埋蔵文化財係臨時職員)	~平成23年2月28日
調査補助員	池田文江・小林薰・月橋香奈子・山岸サチ子(柏崎市遺跡考古館)	50音順
整理作業員	大野博子・片山和子・白川智恵・荻野しげ子(柏崎市遺跡考古館)	50音順

平成23年度 整理業務

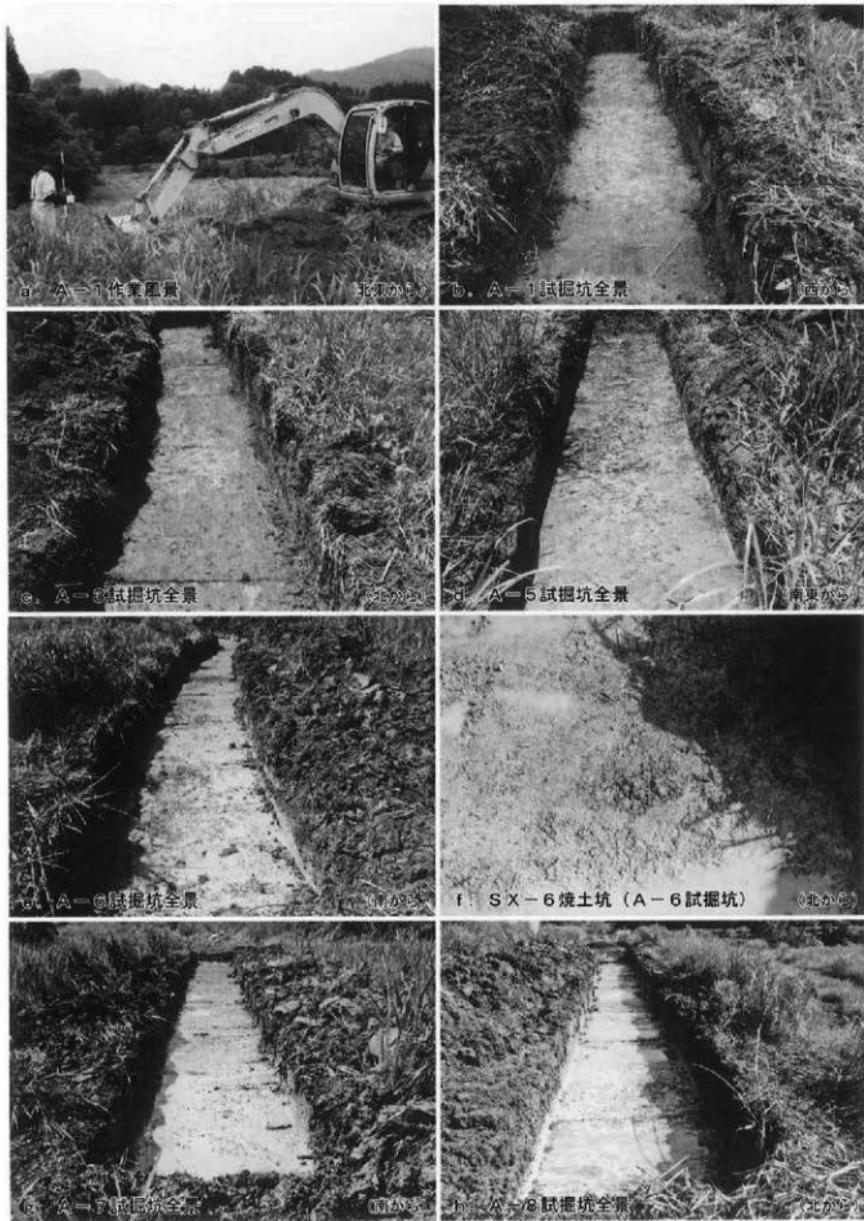
調査主体	柏崎市教育委員会 教育長 小林和徳	~平成23年10月29日
	大倉政洋	平成23年10月30日~
(担当: 教育総務課 遺跡考古館)		
総括	本間敏博(教育部長)	
	猪俣哲夫(課長)	
監理	品田高志(埋蔵文化財係長・学芸員)	
庶務	田中裕美子(埋蔵文化財係非常勤職員)	
調査担当	中野純(埋蔵文化財係主任・学芸員)	
	伊藤啓雄(埋蔵文化財係主査・学芸員)	
	中島義人(埋蔵文化財係主査・学芸員)	
調査員	阪田友子(埋蔵文化財係埋蔵文化財調査員)	~平成24年2月29日
整理作業員	小林薰(柏崎市遺跡考古館)	

II 坂田地区





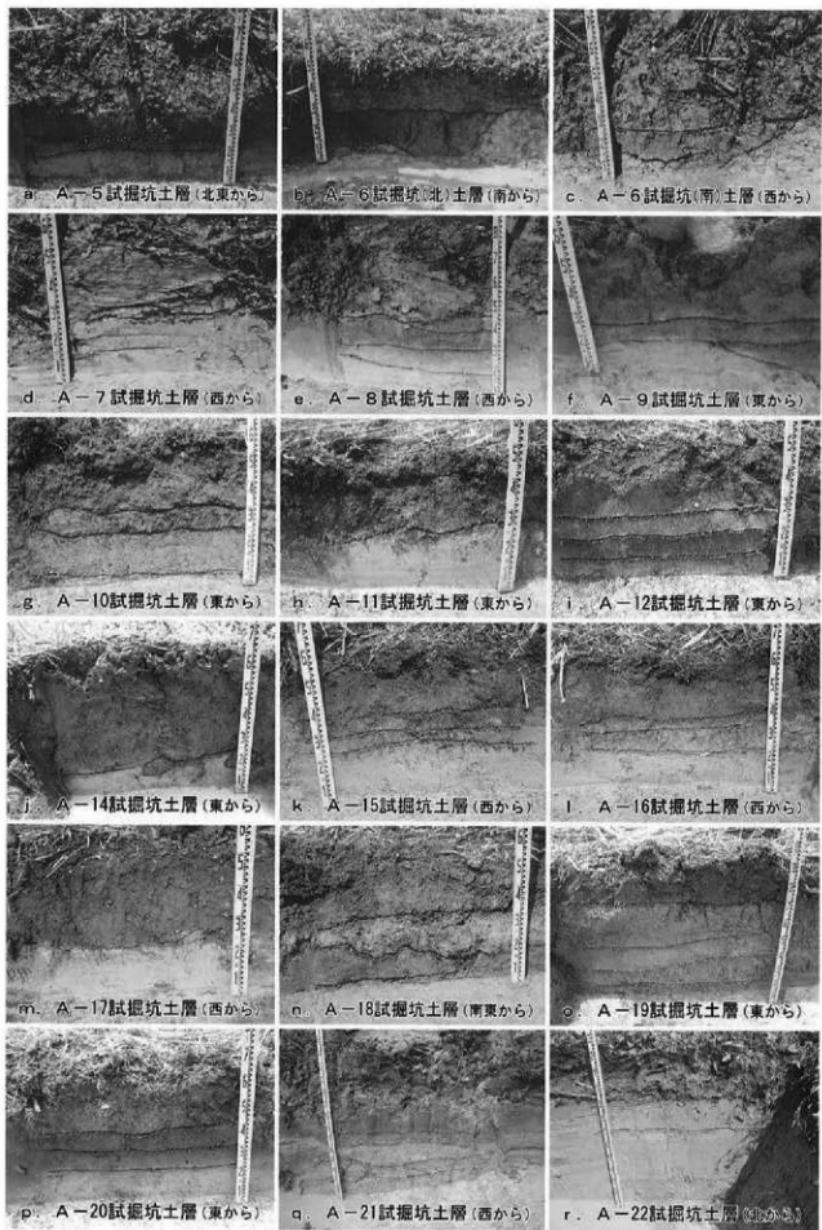
III 女谷・市野新田遺跡群（第3次） 2



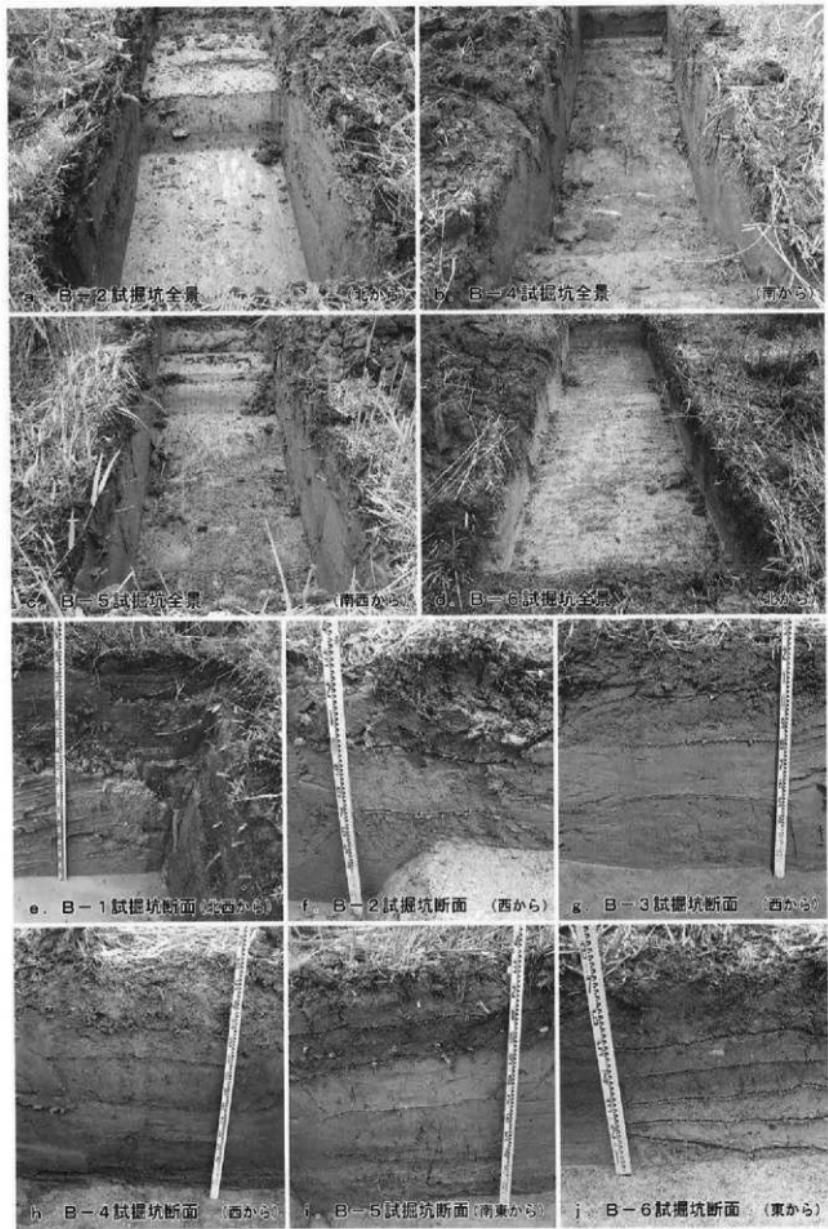


III 女谷・市野新田遺跡群（第3次） 4





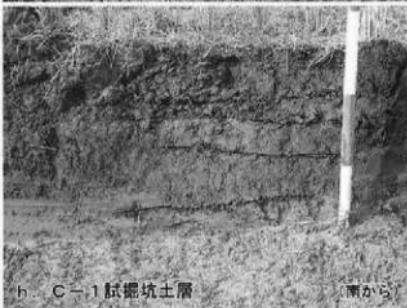
III 女谷・市野新田遺跡群（第3次） 6







IV 別俣地区（第1次） 3



IV 別俣地区（第1次） 4



V 内郷遺跡群 1



a. 甲戸地区近景

(東から)



b. 甲戸地区近景

(西から)



c. 甲戸遺跡群近景

(南から)



d. 清水元遺跡群近景

(南から)



e. 別山地区東部近景

(北西から)



f. 別山地区西部近景

(北から)



g. 伊毛大新田遺跡群近景

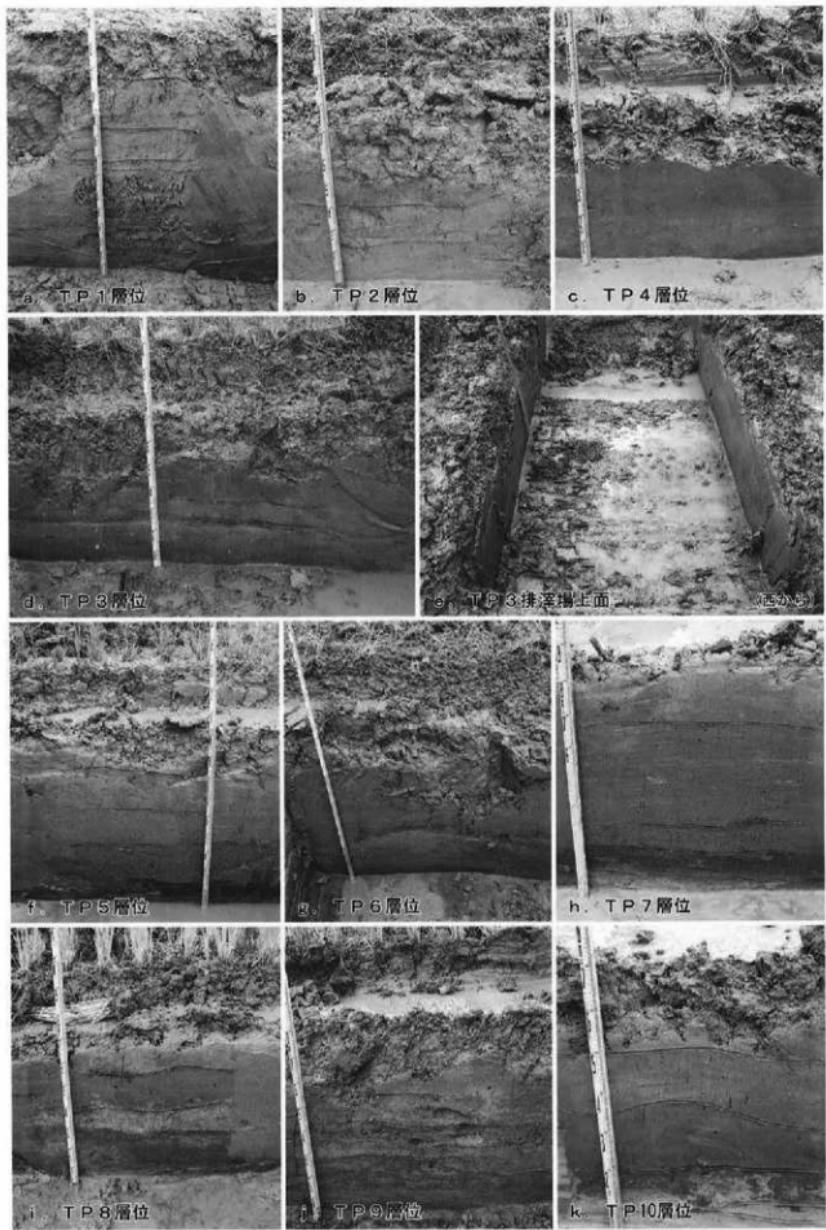
(東から)



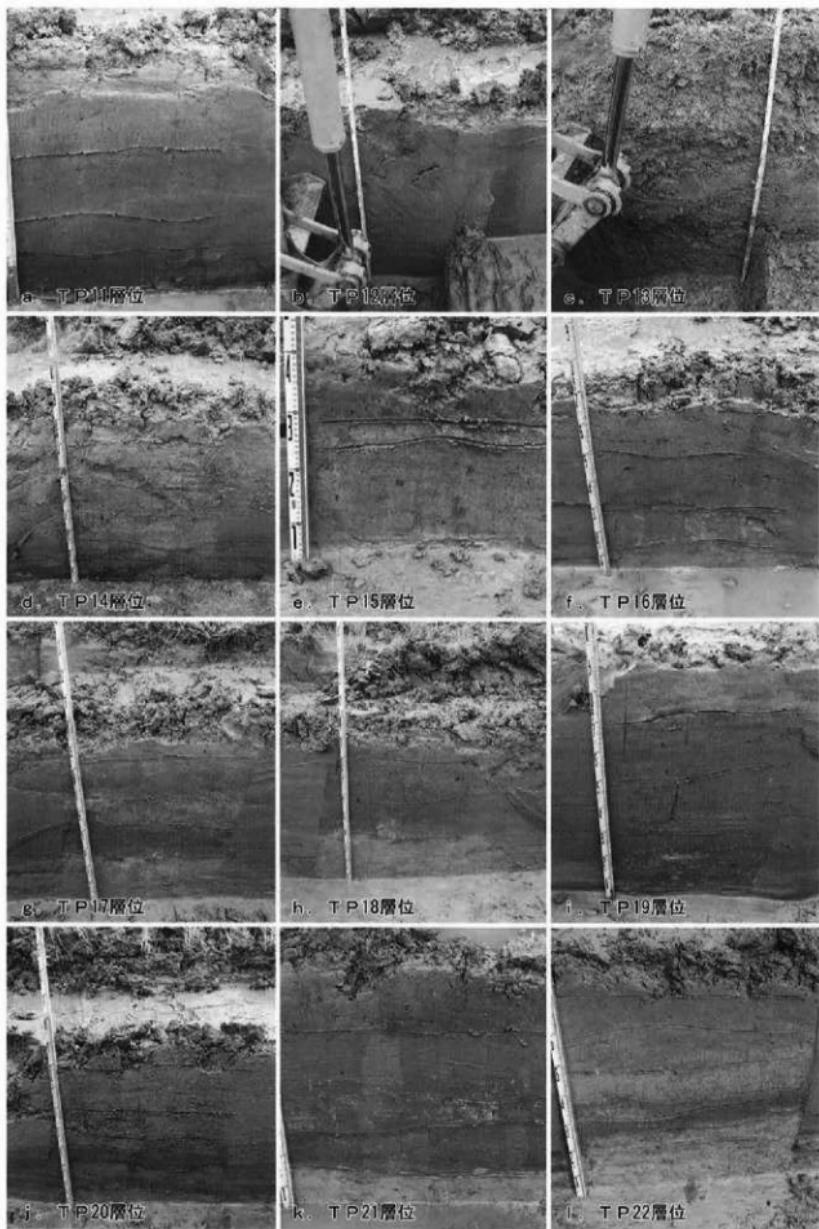
h. 伊毛社区近景

(東から)

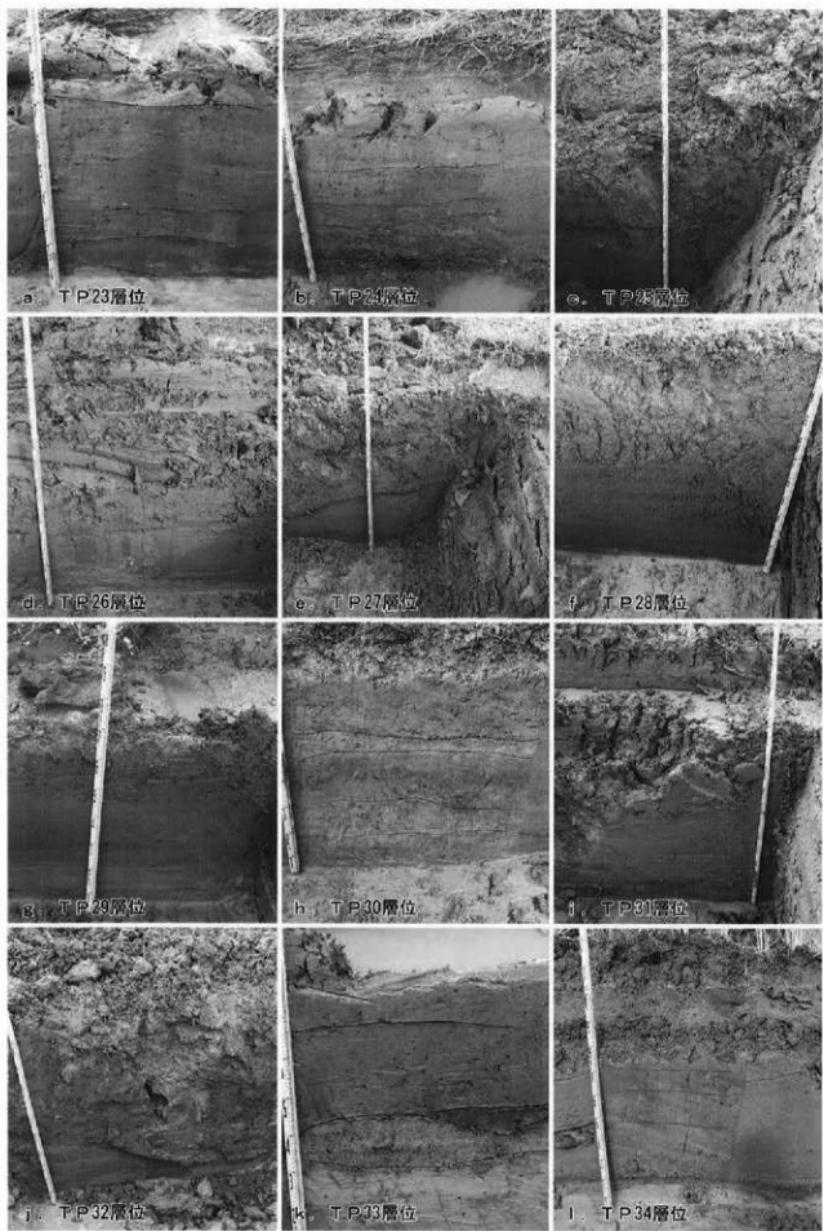
V 内郷遺跡群 2

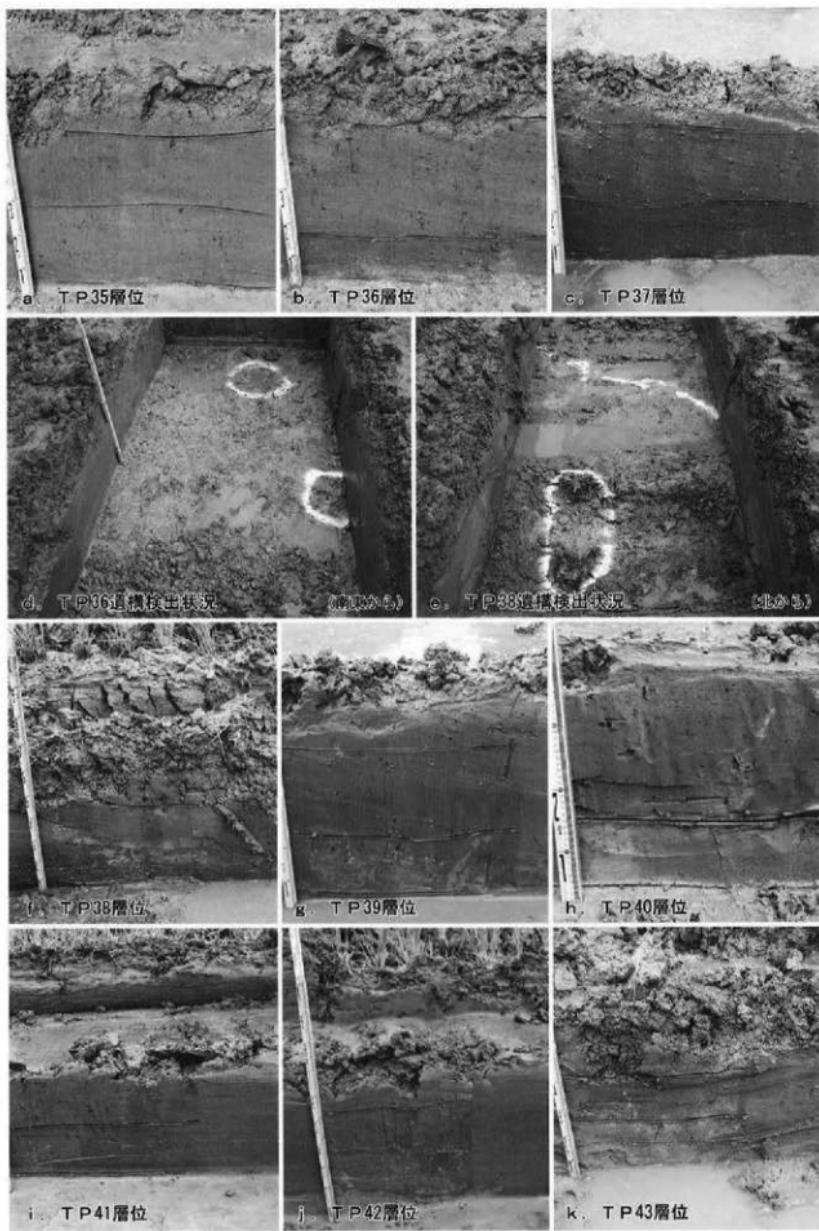


V 内郷遺跡群 3

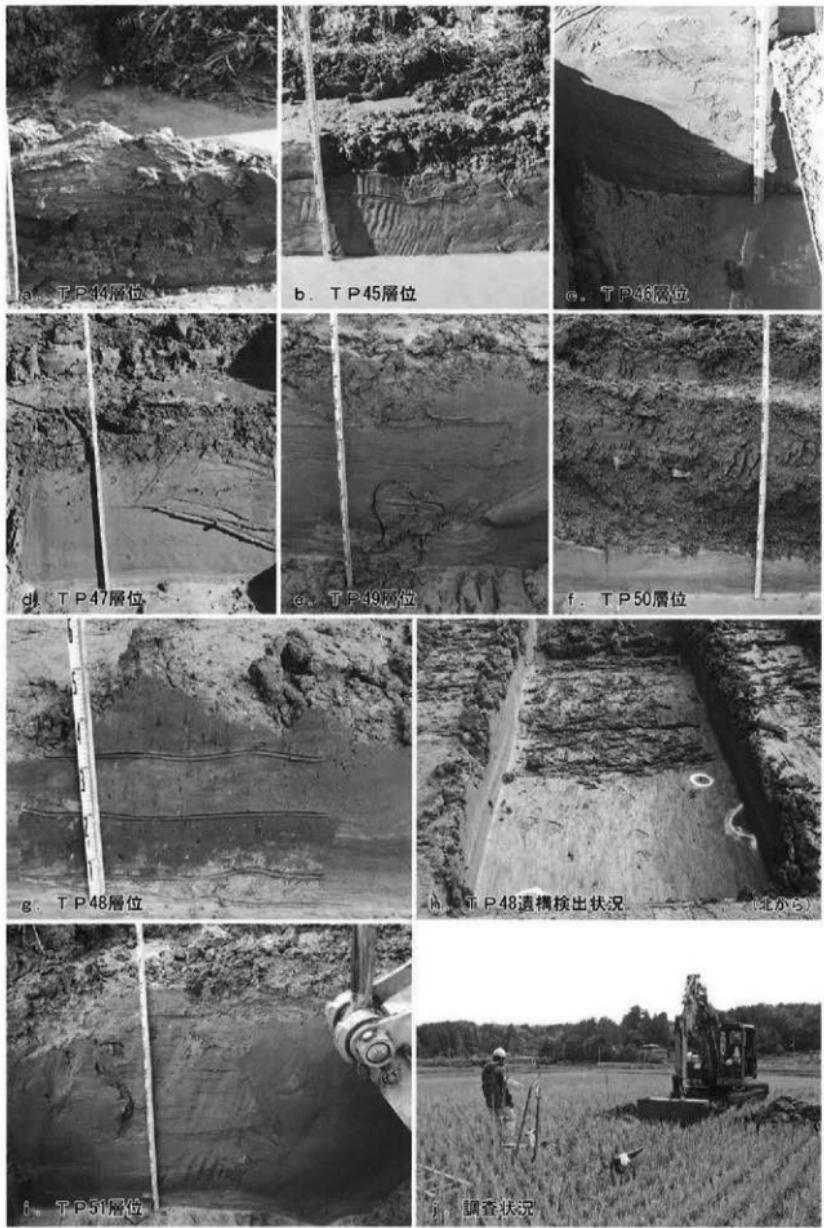


V 内郷遺跡群 4





V 内郷遺跡群 6



TP 3



a. 甲戸遺跡出土遺物

TP 37

TP 38

TP 26



TP 36



b. 清水尻遺跡出土遺物

V 内郷遺跡群 8

TP 48

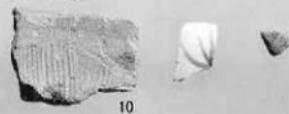


a. 伊毛大新田遺跡出土遺物 1

TP 49



TP 51上層



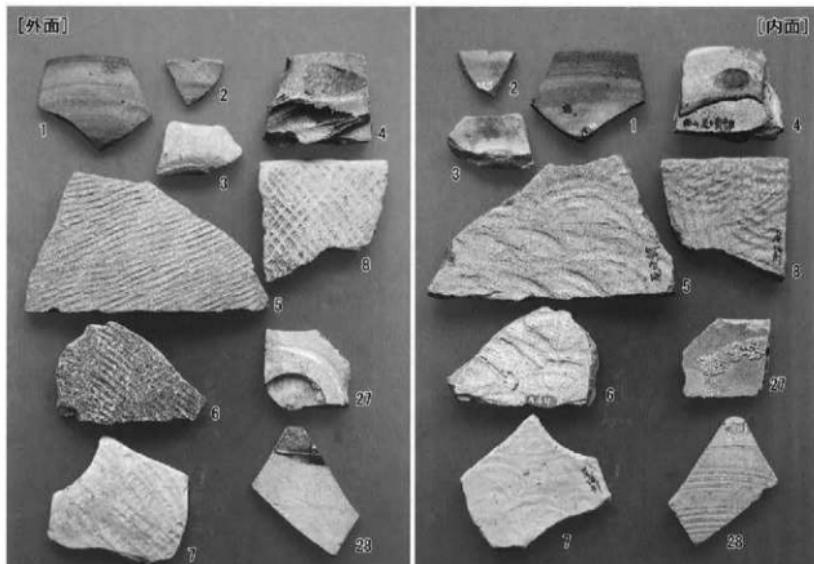
10

TP 51下層



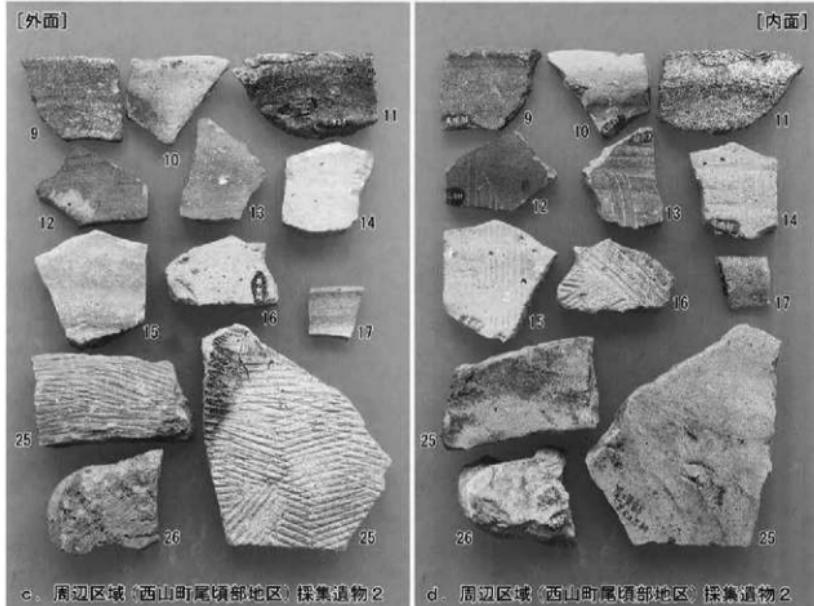
b. 伊毛大新田遺跡出土遺物 2

V 内郷遺跡群 9



a. 周辺区域(西山町尾傾部地区) 採集遺物 1

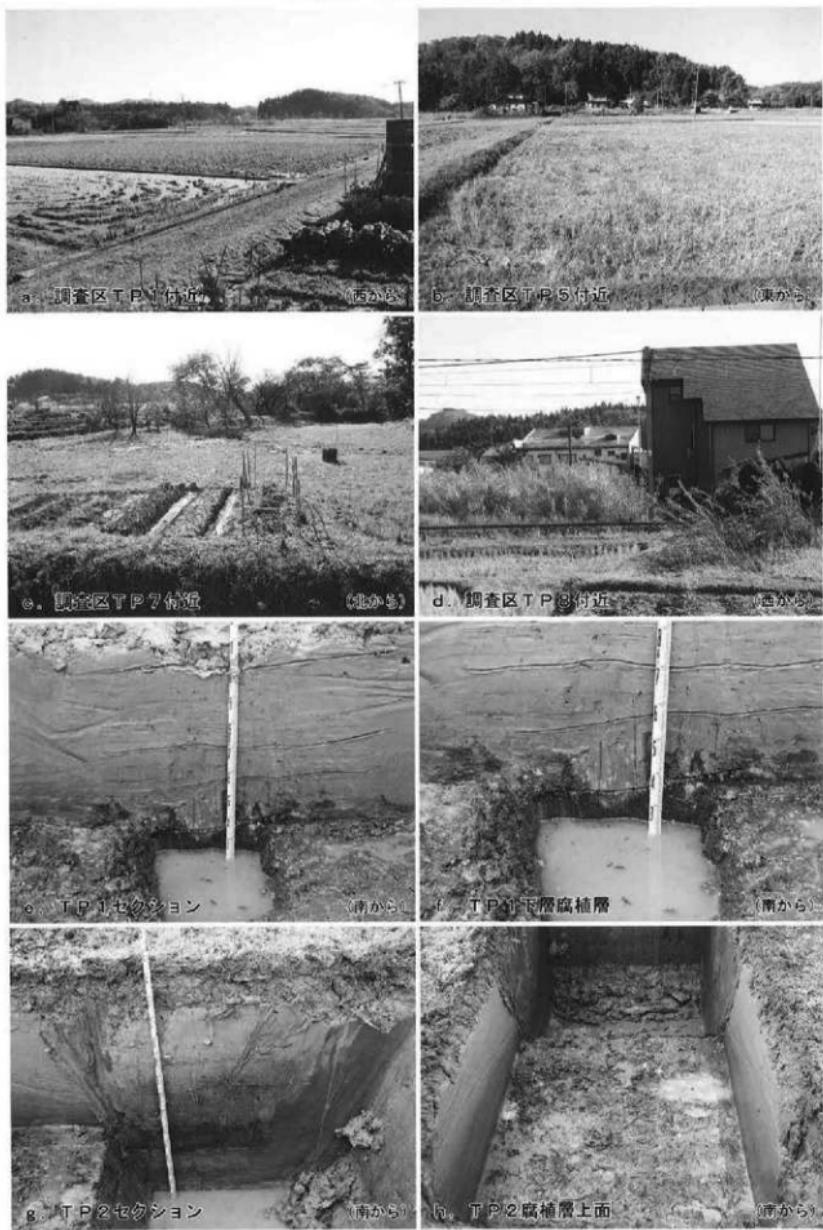
b. 周辺区域(西山町尾傾部地区) 採集遺物 1



c. 周辺区域(西山町尾傾部地区) 採集遺物 2

d. 周辺区域(西山町尾傾部地区) 採集遺物 2

VI 長嶺前田遺跡（第1次） 1



VI 長嶺前田遺跡（第1次） 2



VI 長嶺前田遺跡（第1次） 3



e. 出土遺物

VII 剣下川原遺跡 隣接地 1



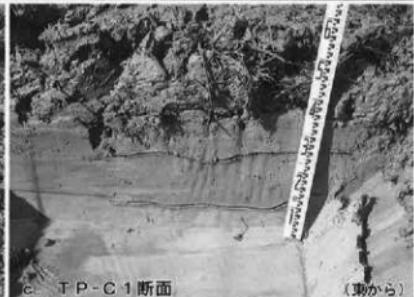
a. 調査対象区域近景

(東から)



b. TP-C1全景

(北から)



c. TP-C1断面

(東から)



d. TP-C2全景

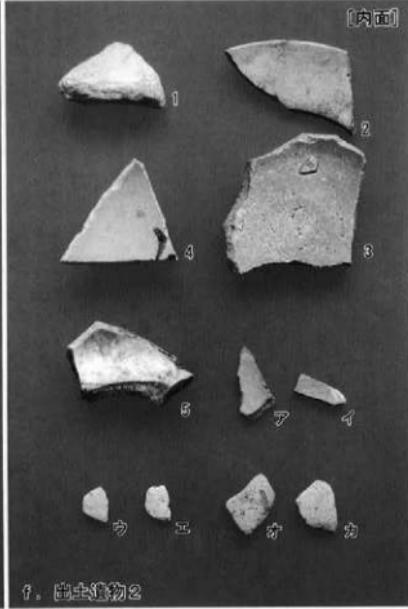
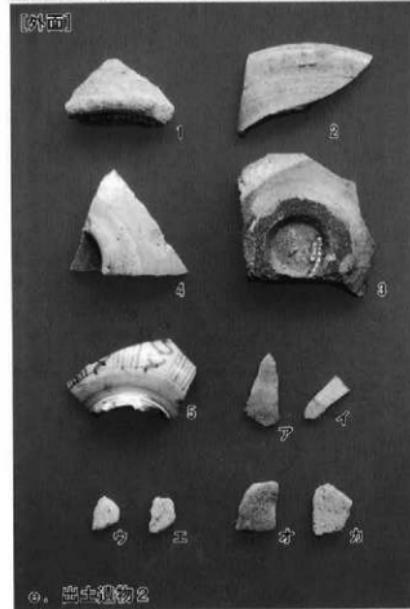
(北から)



e. TP-C2断面

(東から)

VII 剣下川原遺跡 隣接地 2



報告書抄録

ふりがな	かしわざきしのいせき								
書名	柏崎市の遺跡 21								
副書名	新潟県柏崎市内遺跡 平成 22 年度発掘調査報告書								
卷次									
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第 66 集								
編著者名	伊藤啓雄(編) 中野純 中島義人								
編集機関	柏崎市教育委員会								
所在地	郵便番号 945-8511 新潟県柏崎市中央町 5 番 50 号 TEL 0257-23-5111								
発行年月日	2012 年 3 月 30 日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	発掘期間 西暦年月日	発掘面積 m ²	発掘原因	
さかた ち る く 坂田地区	新潟県柏崎市 西山町坂田	15205		37° 26' 57"	138° 39' 45"	2010.05.06	10.1	試掘・確認 調査	
おとこだに いわ の しん 女谷・市野新 田遺跡群 (第3次) てんのうわいせい 天皇峰遺跡	新潟県柏崎市 大字市野新田	15205	996	37° 14' 50"	138° 31' 50"	2010.06.08 ～ 2010.06.14	577.2	試掘・確認 調査	
べつほか ち る く 別俣地区 (第1次)	新潟県柏崎市 大字久米	15205		37° 17' 35"	138° 35' 19"	2010.10.19 ～ 2010.10.20	30	試掘・確認 調査	
かのうち 内 ごく 郷 遺 跡 ぐん 群	甲戸遺跡 ささら跡	新潟県柏崎市 西山町別山字 甲戸	15205	997	37° 29' 37"	138° 42' 12"			
	清水尻遺跡 しみずじり せき	新潟県柏崎市 西山町別山字 清水尻	15205	998	37° 29' 32"	138° 41' 53"	2010.10.25 ～ 2010.11.04	229.5	試掘・確認 調査
	伊毛大 新田遺 跡	新潟県柏崎市 西山町伊毛字 大新田	15205	999	37° 28' 14"	138° 40' 23"			

柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 66 集

柏崎市の遺跡 21

—新潟県柏崎市内遺跡 平成 22 年度発掘調査報告書—

平成 24 年 3 月 23 日 印刷

平成 24 年 3 月 30 日 発行

発行 柏崎市教育委員会

〒945-8511 新潟県柏崎市中央町 5 番 50 号

印刷 株式会社 小田